

未来を創る子供たちの育成に向けて

埼玉教育

第1号
令和7年7月
No.829

特

集

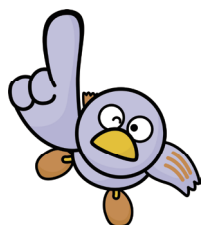
- ① 確かな学力の育成
- ② 豊かな心と健やかな体の育成



飯能高校 × DX ハイスクール

～ Challenge to the next stage ! ～

県立飯能高等学校



【コバトン】

埼玉県立総合教育センター



【さいたまっち】

令和7年度「埼玉教育」第1号 目次

目次

巻頭挨拶

学習評価について考える ～生徒の多様な能力を評価する多面的評価～ 埼玉県教育委員会 教育長 日 吉 亨 1

巻頭挨拶

未来を拓く学びの拠点 ～学び続ける先生方と共に～ 県立総合教育センター 所長 馬 場 敏 男 2

県教委事業紹介

令和7年度 大宮駅開業・大宮公園開園140年企画展
「名所 大宮ー鉄道のまち・公園のまちー」の紹介 県立歴史と民俗の博物館 学芸員 木 村 遼 之 3

特別史跡「埼玉古墳群」～さきたまの博学連携事業～ 県立さきたま史跡の博物館
広報・学習支援 担当課長 山 本 麻 理 子 5

公募展「みつめて、かんじて、たべてみて！
ー作品のみかた・味わいかた」 県立近代美術館 教育・広報担当 6

シリーズ 研修観の転換

新たな教職員の学びに向けて 県立総合教育センター
教職員研修担当 指導主事 佐 瀬 正 伸 7

特集①確かな学力の育成

飯能高校 × DX ハイスクール
～ Challenge to the next stage ! ～ 県立飯能高等学校 校長 矢 島 得 充 9

特集②豊かな心と健やかな体の育成

令和6年度全国学校体育研究最優秀校（文部科学大臣賞）
運動の楽しさや喜びを味わい、主体的に運動に取り組む児童の育成
～体育授業の充実を通して～ 川口市立並木小学校 教諭 福 田 宇 倫 11

『心も体も歯もキラリ』～歯・口の健康から心・体の健康へ～
生涯にわたる健康意識の向上を目指して 羽生市立新郷第一小学校 13

実践論文

自由進度学習において、「深い学び」にいたるための授業者の役割とは
どのようなものだろうか
～公民的分野「私たちと国際社会の諸課題」の授業実践より～ 新座市立第五中学校 教諭 橋 本 一 秋 15

「発信技能を高める」授業づくりの実践
～学習意欲を高め、英語好きな生徒の育成を目指して～ 坂戸市立浅羽野中学校 教諭 大 木 葵 17

「図画工作は楽しい！と感じてもらうために」
～自分で考えてつくりだす喜びを味わうような授業展開の実践～ 蓮田市立蓮田中央小学校 教諭 中 村 恵 三 子 19

児童が数学的な見方・考え方を働かせることを目指した算数指導
～三角形と四角形の求積における児童の困難性に着目して～ 入間市立金子小学校 教諭 斉 藤 雄 佑 21

「主体的・対話的で深い学び」について授業者として思うこと 県立本庄高等学校 教諭 安 齋 由 佳 23

「技術の発達を主体的に支え、技術革新を牽引する力」を育てる
技術・家庭科（技術分野）の学習指導に関する研究
～第3学年「統合的な問題の解決」に焦点をあてた授業改善～ 熊谷市立富士見中学校 教諭 横 田 真 澄 25

我がまち、こんなまち

住みたい・働きたい・訪れたい
元氣と希望に出会えるまち 東松山 東松山市 政策財政部広報広聴課
主事補 川 合 鼓 乃 27

教育長からのメッセージ

美里町の教育『信頼と感謝』 美里町教育委員会 教育長 木 村 健 治 28

表紙	飯能高校 × DX ハイスクール ～ Challenge to the next stage ! ～	県立飯能高等学校
表紙見返し	目次	
裏表紙見返し	「中枢を知る」	県立大宮光陵高等学校 第2学年 西 潟 莉 来 (出品当時)
裏表紙	「朝を想えば」	県立芸術総合高等学校 第2学年 東 郷 静 香 (出品当時)

学習評価について考える ～生徒の多様な能力を評価する多面的評価～

埼玉県教育委員会 教育長 日吉 亨^{ひよし とおる}



令和7年度「埼玉教育」第1号が発刊されました。埼玉県の教育現場に携わる皆様にとって、有益な情報や刺激となることを願っております。

はじめに、本年5月25日（日）に秩父ミューズパークを会場に開催されました第75回全国植樹祭について御礼申し上げます。県内では66年ぶりの開催となり、多くの皆様の御協力の下、盛大に開催されました。苗木のスクールステイなど関係の取組に御協力いただいた皆様、そして、練習・リハーサルから本番まで、それぞれの立場・役割で式典に御参加いただいた多くの皆様に、心から感謝申し上げます。

さて、本稿では、令和の時代における教育の在り方について、私自身の考えを述べたいと思います。

現代社会は、少子・高齢化、過疎化、グローバル化、デジタル化など、多くの課題を抱えています。これらの課題は、複雑に絡み合い、容易に解決できるものではありません。しかも、互いに影響し合い、速いスピードで深刻さを増しているようにも思えます。

今こそ、一人一人の子供が取り残されることのないよう、私たちは教育の本質に立ち返る必要があります。多様性や包摂性を尊重するとともに、批判的思考力や情報リテラシーを含む、現代社会に生きる力を育む教育を推進することで、誰も取り残さない持続可能な社会を目指すことが重要です。

また、学校と家庭、地域の連携が不可欠です。県内では、コミュニティ・スクール等により、社会や地域全体が協力して子供たちを育てていく取組が行われています。このような取組を活用し、可能な限り透明性を持って情報を共有し、オープンなコミュニケーションを心がけることが大切です。

そして、今回申し上げたいのは、「学習評価」についてです。言わずもがな、学校における学習の原点は、授業にあります。教員として子供から信頼を得るためにも、先生方御自身の授業研究には、徹底的にこだわっていただきたいと思います。

中でも、評価は学習の動機づけに重要なテーマです。評価を行う主な目的は大きく二つあります。

- (1) 子供が自分の学びを振り返り、次の学習に活かす
- (2) 教員が子供一人一人の学習状況や理解度を把握し、授業改善や個に応じた指導に役立てる

ここで、評価の対象、つまり、何を評価しようとするのかですが、評価の対象は学習状況であり、単なる能力の高低だけではありません。例えば、駆け足が速い子供がいたとして、

その子供が以前よりどのように努力して成長したかを捉えていく必要があります。

評価とは、子供の学習状況を「見える化」し、その学びをより良くしていくための、子供と教員、双方にとっての重要なツールです。子供にとっては、努力や成長を認められ、自信や学習意欲を高められる。教員にとっては、授業内容や指導方法を見直し、より効果的な教育を実現するといった役割を担っています。

これからの社会では、知識や技能だけでなく、「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性・問題解決力」など、より多面的で実践的な能力が求められます。評価においても、従来の知識偏重型から、子供の多様な能力を評価する多面的評価へと速やかに転換していく必要があります。

例えば、誰も見ていなくても自主的に一生懸命に黒板を消す子供がいます。このことで教員は、気持ちよく授業ができ、クラス全員が授業に集中できます。教室というチームが、一体となって学力を高めるためには重要な行動ではないでしょうか。

他人が気付かないところで、指示されなくても努力や貢献ができる子供は、社会のどこかを支える貴重な人材となるでしょう。このような行いは、教員が見ようとしなければ、なかなか見えません。どんな子供にも、その子ならではの長所があるはずです。しっかりと子供のよいところを見てもらいたいと思います。

このように評価は、子供の成長を促すだけでなく、教員自身の人間的な成長にも繋がるものです。評価を通して、子供は、「学び続けることの喜び」や「人の役に立つことの喜び」を感じることができるでしょう。教員は、自らの励ましにより、「子供たちの表情が希望に輝くこと」、「子供たちが目標に向かって粘り強く取り組む姿勢が増していくこと」を再発見することができるでしょう。評価という営みを通じて、教員も子供も共に明るい未来に向かって成長していけることを、願ってやみません。

結びに、子供は、予測不能な未来を生き抜くための力を必要としています。正解のない時代に、子供たち一人一人が幸せや生きがいを感じられ、自他を大切に豊かな人生を送れるよう、改めて、私たちはどのような教育を展開していくべきか。この問いを、今後も探究していく必要があります。伝統ある「埼玉教育」が、引き続き皆様の価値ある教育実践の場となることを心から願っております。

未来を拓く学びの拠点 ～学び続ける先生方と共に～

県立総合教育センター 所長 馬場 敏男



1 はじめに

中央教育審議会において令和6年12月25日「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」が諮問され、現在、次期学習指導要領の策定に向けた様々な議論がなされております。

また、埼玉県においては、昨年度「第4期埼玉県教育振興基本計画」が策定され、基本理念に「豊かな学びで未来を拓く埼玉教育」を掲げております。本計画を実現するためには、教職員の皆様一人一人がその力を十分に発揮できる環境を整えることが何よりも重要です。そして、その土台を支えるのが、埼玉県立総合教育センター（以下、センターという）の役割であると考えています。

「学び続ける教師」として、変化する時代に柔軟に対応し、子供たちにとって最善の学びを提供するためには、私たち自身が学び、成長していくことが不可欠です。教職員の皆様が安心して学び、新たな一步を踏み出せるよう、センター所員一同、皆様の伴走者として全力で支援してまいります。

2 未来を拓く学びの拠点

センターは、研修の場や学習機会の提供に留まることなく、教職員の皆様が「未来を拓く力」を育むために、共に学び続ける組織となることを目指しています。

教育の現場は、少子高齢化や多様化する社会問題、急速に進展するテクノロジーなど、かつてない変化の中にあります。そのような中で、私たちは、未来の子供たちに必要な力を育むことができる教育を提供するために、学びの在り方そのものを見直すための研究をしていく必要があります。

センターは、これらの社会的な変化を見据えた教育の在り方を教職員の皆様や関係機関と連携して研究し、具体的な実践につなげる役割を果たしていきます。

3 研修観の転換

これまで研修は、「知識の伝達」や「課題解決のための方法論の提示」に重点が置かれる傾向にありました。しかし、現代社会においては、正解のない課題に取り組む力や、創造的に考え続ける力が益々求められてきております。そのため、研修の在り方も「受け身で教わる」ものから「主体的に学びをデザインする」ものへと転換していく必要があります。

センターでは、教職員の皆様が自ら課題を発見し、その解決に向けて学びを深められるような参加型研修や実践的なプログラムを充実させていきます。

4 学び続ける教師

教育の質を高めるために最も重要なのは、教職員一人ひとりが「学び続ける教師」として成長し続けることです。教育は、常に変化する子供たちや社会のニーズに応じていく仕事であり、そのためには教職員自身が学び続ける姿勢を持ち続けることが大切です。センターでは、教職員の皆様が自己成長を遂げられるよう、「埼玉県 校長及び教員としての資質向上に関する指標」に基づき、教職員のキャリアとニーズに応じた多様なプログラムを提供してまいります。

また、他校の教職員や専門家、自分自身との対話を通じて、新たな視点や知見を得る機会を積極的に創出し、教職員同士が互いに刺激し合い、学び合う文化を醸成していきます。

5 専門機関との連携

教育の課題は年々、複雑化多様化し、学校だけでは解決することが難しい状況が増えてきております。そのため、教育現場を支えるためには、さまざまな専門機関と連携し、総合的に支援する体制が必要です。センターでは、大学や研究機関など約60か所と連携し、埼玉の児童生徒の確かな学びにつながる研究や研修を進めていきます。

特に、国際協力機構 JICA との連携では、職員1名が国際協力推進員としてセンターに配置され、多文化共生、国際理解教育などの授業づくりや研修プログラム開発を担っております。センター内の JICA サテライト展示を含め、御活用ください。

6 結びに

これからも、教育の現場での課題やニーズに耳を傾けながら、関係する皆様と共に課題を解決し、未来を切り拓いていけるよう、全力で諸事業に取り組んでまいります。ぜひ、皆様のお力添えをいただき、共に、子供たちの可能性を最大限に引き出す教育を創り上げてまいりたいと存じます。

令和7年度 大宮駅開業・大宮公園開園 140 年企画展 「名所 大宮ー鉄道のまち・公園のまちー」の紹介

会期：令和7年7月12日（土）～8月31日（日）

県立歴史と民俗の博物館 学芸員 木村 遼之

1 はじめに

令和7年（2025）は、JR 大宮駅の開業ならびに大宮公園の開園 140 年にあたる年である。140 年前にこれらが誕生したことは、その後の大宮のまちの発展に大きく関係している。本展では、駅と公園の 140 年を中心に、大宮のまちの歩みを紹介する。

2 江戸時代までの大宮

「大宮」という地名は氷川神社に由来する。史料によっては氷川神社が「大宮」と呼ばれていたことも確認できる。本展ではまず氷川神社から地域の歴史を紐解いていく。

氷川神社は長い歴史を有し、最も古いものでは、8 世紀の記録でその名を確認できる。当時、氷川神社の祭祀権を認められたはせつかべふわまろ丈部不破麻呂という人物の一族の活躍によって、氷川神社は朝廷から厚い処遇を得て広く知られるようになっていた。

戦国時代に入ると、氷川神社はじゅうのう寿能城を築いたとされる武将潮田氏と関係を持っていた。潮田氏は、岩付の太田氏、次いで小田原の北条氏の配下であった一族である。天正 18 年（1590）、豊臣秀吉が小田原に攻め込んだ際には、氷川神社の人々は寿能城に加勢して戦ったようだが、最終的に豊臣方によって北条氏は降伏し、潮田氏の当主も討死した。後世の記録によると、生き延びた潮田氏の家臣たちは大宮周辺に居住し、氷川神社の社家になったり、大宮宿の成立に関わったりしているという。

その後、神社は徳川氏から社領の寄進を受け、江戸時代を通して多くの人が訪れている。

氷川神社の門前町であった大宮のまちは、徳川氏が五街道の整備を行ったことで、中山道の宿場町の一つとなって栄えた。現在の大宮駅東口の旧中山道沿いに宿泊施設である本陣や脇本陣、旅籠屋や休憩所、物資輸送を取り次ぐ問屋場などが並び、中山道の通行者や氷川神社への参拝者でにぎわうようになっていく。

3 明治維新と大宮

明治元年（1868）、江戸へ入った明治天皇は、氷川神社

に行幸した。氷川神社は天皇の勅使が派遣されて祭祀が行われる神社となり、また伊勢神宮に次ぐ官幣大社という社格を与えられた。

一方、大宮のまちは明治維新を迎えると、大名の通行や、宿場町で中継しながら物資を輸送する江戸時代の諸制度がなくなり、宿場町としての役割を失った。また、廃藩置県につながる近代地方制度整備のなかで、明治 2 年（1869）には大宮宿に大宮県（主に現在の埼玉県中央部や東京都北区、豊島区などの範囲の県）の県庁を設置する動きがあったが、県庁所在地は浦和に変更されてしまった。その後、埼玉県が成立した後もそのまま浦和が県庁所在地となった。宿場の役割の消失、浦和への県庁設置により明治初期の大宮は町勢を失い、人口も減少している。

4 大宮駅と大宮公園の誕生

こうした状況が変化する契機となったのが、鉄道の建設であった。鉄道建設を求める華族、士族らが明治 14 年（1881）に設立した日本鉄道会社は、政府の鉄道計画を引き継いで鉄道建設を始め、明治 16 年（1883）に上野・熊谷間（現 JR 高崎線）を開業させた。このとき開業した駅は上野、王子、浦和、上尾、鴻巣、熊谷の 6 駅で、大宮に駅は置かれなかった。

続いて上記の路線の途中に設ける分岐点から白河までの区間の工事の段階になると、大宮は分岐点の候補となった。実は、上記高崎線開業時には大宮駅は設けられなかったものの、大宮に駅を設置すること自体は当初から計画されており、分岐点の有力な候補として考えられていた。浦和案、熊谷案も検討の結果、大宮で分岐することが決定し、明治 18 年（1885）3 月 18 日、ついに大宮駅が開業した。

駅ができたことは大宮のまちを大きく変えた。鉄道の分岐点として車輛が多く集まるため、明治時代後半から昭和初期にかけ、大宮には鉄道工場や各鉄道事務所、さらには鉄道を利用する製糸工場や運送業者などが集まるようになった。鉄道関係の労働者が多く住むことになったため、大宮の地域経済や文化は鉄道の影響を大きく受けることになる。こうして大宮は鉄道のまちとなっていった。



【史料 1】絵葉書 大正時代の大宮駅（個人蔵）

大宮駅での分岐が議論されていたのと同時期に、地元の人々の請願によって大宮公園が誕生した。明治初期、政府は欧米にならって各地の名所旧跡を「公園」としており、地元が氷川神社の奥山を公園にしたいと申し出たのである。開園した明治時代の大宮公園は今より狭く、園内の樹木の8割は松で桜が少ないなど現在とは異なる景観であり、一番の特徴は、そうした松林のなかに複数の旅館、料亭の建物が存在したことだった。これは、公園の敷地を区割りして民間に貸出し、その使用料で公園の維持管理を賄う仕組みだったことによる。うっそうとした松林のなかに風情のある料亭、旅館の並ぶ大宮公園は広く知られるところとなり、氷川神社とともに多くの人が訪れる名所となった。



【史料 2】開園当時の大宮公園の図面（写し）
みどりの図書館東京グリーンアーカイブズ蔵

5 東京近郊の名所へ

昭和7年(1932)、それまで汽車であった赤羽・大宮間に電車が走るようになる。大宮から汽車で上野に行くには1時間以上を要し、本数も多くはなかったが、電車では40分程度で行けるようになり、運転本数も倍増した。これにより、大宮は首都東京への通勤・通学圏内となった。

同時期、公園にも大きな変化が訪れていた。大正時代、施設の老朽化や荒れ地が目立つようになったため、改良する動きがでてきたのである。大正9年(1920)、現久喜市菖蒲町出身の林学博士本多静六らは、都市と交通の発達を念頭に、都会の人々が休暇に訪れる郊外の公園を目指し

て改良計画を作成した。これにより北側の田んぼが埋め立てられ、大宮公園は現在とほぼ変わらない規模に拡張され、旅館、料亭が立ち退き、運動場やボート池、児童遊園地などのレジャー施設が充実して、雰囲気は一変した。

昭和初期の大宮公園の改良工事と電車の開通は、密接に関係している。大宮のまちでは公園をはじめとする各名所を紹介するパンフレットや絵葉書を作成し、観光したうえで大宮に居住してもらおうという東京向けのプロモーションを盛んに行なった。交通の要衝で、公園を始めとするレジャー施設が充実する大宮は「理想郷」と表現された。

6 おわりに

本展では、以上のようなまちの歩みを、様々な資料と写真を用いて概観する。今年は昭和100年として昭和の時代にも注目が集まっており、本展が昭和初期の名所大宮を中心とした地域の歴史や魅力に触れ、新たな発見につながる機会となれば幸いである。

【関連事業】

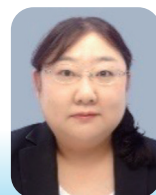
- ・鉄道整備の現場を見にいこう！大宮工場見学
日時：令和7年8月13日（水）13:30～
会場：東日本旅客鉄道（株）大宮総合車両センター
要事前申込み 抽選
- ・みんなの名所 大宮 フォト & エピソード
周辺地域の写真・エピソード等を募集し展示。
7月31日（木）まで募集中！
- ・学芸員による展示解説
7月20日（日）、7月27日（日）、8月3日（日）、
8月24日（日） 13:30～14:00、事前申込不要
※詳細は当館ホームページを御確認ください。
<https://saitama-rekimin.spec.ed.jp/>



特別史跡「埼玉古墳群」

～さきたまの博学連携事業～

県立さきたま史跡の博物館 広報・学習支援 担当課長 やまもと まりこ 山本 麻理子



1 はじめに

県名発祥の地、行田市埼玉にある埼玉古墳群は、5世紀後半から7世紀中頃にかけて150年以上にわたり大型古墳が連続して営まれた古墳群である。令和2年3月に、埼玉県初の特別史跡に指定された。その埼玉古墳群の中にあるさきたま史跡の博物館では、稲荷山古墳から発掘された国宝やたくさんの埴輪、土器などが飾られ、県内外を問わず多くのお客様が来館している。学校団体に向けても、学習支援担当を中心に様々な取組を行っている。博物館のもつ専門性をどのように学校の教育活動に活用できるか、以下に述べていく。



【日本最大級の円墳「丸墓山古墳」】

2 さきたまの博学連携事業

(1) 博物館に行って学ぶ

さきたま古墳公園として整備されている範囲には、前方後円墳8基、大型円墳1基、いくつかの小円墳跡が残されている。「丸墓山古墳」と「稲荷山古墳」は登れる古墳として整備されているため、ぜひ登って古墳の大きさを体感していただきたい。

また、館内では学校団体を対象として、①学校団体向け解説（15分・無料）と、②まが玉作り体験（75分・1人あたり300円）を行っている。解説では、古墳や展示資料の写真をスライドで見せながら、古墳時代の概要や埼玉古墳群の特徴について説明をしている。古墳群散策前の利用がお勧めである。まが玉作り体験では、白い滑石を2種類のヤスリで削りネックレスにする。古代の装飾品であるまが玉を手作りすることは、見学の良い思い出になるだろう。教育効果をより高めるために、ぜひ見学に合わせて体験の実施も検討していただきたい。

(2) 学校に呼んで学ぶ

さきたま史跡の博物館では、教育普及の一環として、県内限定で6種類の出張授業（出前授業）を行っている。令和6年度は、70校の学校に出向いて授業を行った。授業の内容は以下のとおりである。

①当館所蔵の国宝「金錯銘鉄剣」についての調べ学習をメインとした「なるほど！古墳時代（小6以上）」、②歴史クイズをとおして古墳時代の概要について学ぶ「古墳時代へタイムスリップ！（小4以上）」、どちらの授業でも、「金錯銘鉄剣」や「人物埴輪」の精巧なレプリカ、実際に古墳群から発掘された本物の土器片を触ったり観察したりする時間を設定している。

製作体験としては、③「オリジナルまが玉作り」と④「オリジナルはにわ作り」の2種類を用意している（要材料費）。製作の前には、まが玉や埴輪についての簡単な解説を行い、楽しく古墳時代を体感できると好評である。

さらに、学校側からの要望を受け近年ははじめた授業としては、⑤「残していこう大切な文化財～埼玉古墳群～（オンライン授業）」と⑥「さきたま史跡の博物館のお仕事（キャリア教育）」がある。調べ学習のプロである学芸員の話を通じて直接聞くことのできる出張授業は、子供たちにとって良い経験となるだろう。発達段階や特性に応じて授業内容の一部を変更することもできるので、特別支援学校から依頼を受けての授業も増えている。



【出張授業「なるほど！古墳時代」】

3 おわりに

未来を担う子供たちに埼玉古墳群の重要性を伝え、文化財を大切にしようとする心情を育てることは、博物館の未来にもつながっている。学校のため、博物館のため、博学連携事業の推進を図っていく。

公募展「みつめて、かんじて、たべてみて！ —作品のみかた・味わいかた」

県立近代美術館 教育・広報担当

1 はじめに

埼玉県立近代美術館が実施する公募展「みつめて、かんじて、たべてみて！—作品のみかた・味わいかた」は、令和5年度より「美術作品を鑑賞して、食として表現する」という観点で作品の募集を行っています。当館の収蔵作品である課題作品を鑑賞して、わきあがった「食」のイメージ（食感、味や匂いなど）を、感性を働かせて自由な発想で表現するものです。

2 実施報告

令和6年度は、県内の小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の児童生徒から、217点の応募がありました。たくさんのご応募をいただき、誠にありがとうございました。

そして、審査員を務めていただいたアーティスト・ユニット L PACK. の小田桐奨氏と中嶋哲矢氏により、総合グランプリ（審査員特別賞）に選ばれた櫻井博仁さん（小5：受賞時）の作品が食べ物として創作され、「想像が現実になる！」試食イベントを実施しました。櫻井さんは、宮島達男《Number of Time in Coin-Locker》1996年【図1】を鑑賞し、県民150人によってそれぞれ異なる速度で設定された150個のデジタル・カウンターが数字を刻み続ける様子に着目しました。そこから「個人によって時間の流れがちがうように時間を意識した食にしよう」と考え、様々なアイスクリームの溶けるスピードの違い、味や食感の違いがあらわれる『時をきざむアイスクリーム』【図2】を発想しています。L PACK. のお二人は、約1か月の準備期間をかけて、櫻井さんの作品の色合いや形をアイスクリーム【図3】として見事に表現し、数字はチョコレートで再現しました。色鮮やかなアイスクリームは、キウイ、マンゴーなど、色々な味が混ざり合い、大人も子どもも楽しめる美味しさに仕上がっていました。

3 令和7年度

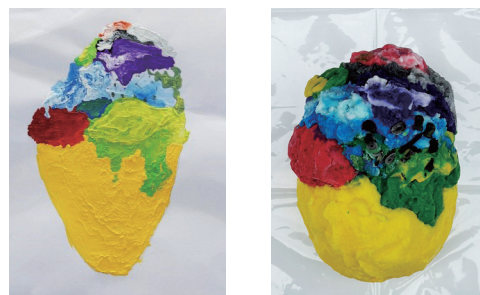
この公募展は、本年度も課題作品を変えて、同じテーマで開催予定です。美術作品の印象は、言葉でうまく

伝えられなくても、自分が感じたり考えたりしたことは様々な方法で、自由に表わすことができるのです。

美術館で作品を鑑賞するときに、知識や準備は特に必要ありません。美術は「わからない」「難しそう」と感じている人も、ぜひこの公募展をきっかけとして、埼玉県立近代美術館を訪れてみませんか。音楽を楽しむように、美術館の作品を、五感を使って素直に感じてみましょう。芸術家が生み出した本物の作品の力や美しさは、直接あなたに語り掛けてきます。本物の芸術作品とあなたの心との距離は、実はとても近いのです。



【図1】宮島達男《Number of Time in Coin-Locker》



【図2（左）】令和6年度 公募展 総合グランプリ受賞作品 櫻井博仁さん『時をきざむアイスクリーム』

【図3（右）】アーティスト・ユニット L PACK. により食べ物として創作された『時をきざむアイスクリーム』

令和7年度 公募展「第3回 みつめて、かんじて、
たべてみて！—作品のみかた・味わいかた」

【作品受付期間】7/12（土）～9/19（金）必着
※詳しくは、当館ホームページをご覧ください。

新たな教職員の学びに向けて

県立総合教育センター 教職員研修担当 指導主事 佐瀬 正伸



1 はじめに

なぜ今「新たな教職員の学び」が求められているのか。その背景には、日本の教育が大きな転換期を迎えているという事実がある。中央教育審議会の令和4年12月の答申などには、教職員の学びに対する従来の見方を抜本的に見直す「研修観」の転換が盛り込まれた。子供たちの学びを充実させるためには、教職員自身の学びも変わる必要があると示されたのだ。

これは、教職員が絶えず専門性を磨き、変化する社会や子供のニーズに対応していくことの重要性が増していることを意味している。実際、令和3年度には教員免許更新制の発展的解消が行われ、今後は教職員が継続的に学び続けるための環境整備が求められている。

本稿では、こうした教育界の潮流を踏まえ、「令和の日本型学校教育」を支える新たな教職員像と、その学びの意味について考えるきっかけを提供したい。

中央教育審議会答申が提示した、今求められる教職員の姿とはどのようなものか。そして現場ではどのような取組が始まっているのか。私が独立行政法人教職員支援機構(NITS)への長期派遣という経験を通じて得た気づきを交えながら、埼玉県における挑戦の一端を紹介し、「なぜ今、新たな教職員の学びが必要なのか」について、ともに考える契機となれば幸いである。

2 中央教育審議会答申が描く「新たな教師の学び」

令和4年12月の中央教育審議会答申『「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について』では、これからの教職員に求められる資質・能力や教師集団の在り方とともに、「新たな教師の学びの姿」が示された。その中核にあるのは、教師自身が高度専門職にふさわしく、主体的に学び続ける姿勢である。また、研修の内容やスタイルも、現場の経験を重視するなど多様であるべきだとされている。

一人一人の教職員が安心して学び、成長できる環境を実現すること——すなわち、子供たちの「主体的・対話的で深い学び」と同様に、教職員自身も主体的に学び続ける専門職へと転換していくことが求められている。

答申では、今後の改革の方向性として『「新たな教師の学びの姿」の実現』や「多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成」などが掲げられた。前者は、教職員一人一人の学び方の改革を意味し、後者は教職員集団をチームとして強化する視点である。現代の学校現場が抱える課題は複雑かつ多様であり、個々の教職員が協働し、互いを補完し合うことが不可欠となっている。専門性や背景が異なる多様な人材を教職員チームに迎え入れ、それぞれが学び合うことによって、組織として子供に最善の教育を届ける——そうした「令和の日本型学校教育」を実現するための土台として、教職員自身の学び直しや、学び続ける姿勢が重視されている。

この答申を受けて、文部科学省や各教育委員会では、教職員の学びを支援する新たな施策が動き出している。たとえば、教員免許更新制の発展的解消に伴い、研修履歴を記録・蓄積するシステムが開発され、喫緊の課題に対応するオンライン研修教材の充実も図られている。制度面においても、教職員が日常的かつ継続的に学べるよう、環境の整備が進められている。

つまり、「新たな教職員の学び」が求められる今、教職員は単に与えられた研修を受ける存在ではなく、自ら学びをデザインし続ける専門職へと変わっていくことが期待されている。

3 NITSによる研修観の転換 ～教職員に学ぶ喜びを～

こうした流れの中で、教職員の研修の在り方そのものを問い直そうとしているのが、NITSである。NITSは各地の教育委員会等と連携し、「研修観の転換」に向けた研修プログラムの開発に取り組んでいる。

「研修観の転換」とは、一言で言えば、研修を「教職員が主体的に学ぶ場」へと作り変えることを意味する。これまでの研修は、「受講する」という言葉が当たり前のように使われていたように、講師の話を一方的に聞き、知識や技術を受け取る場になる傾向が強かった。そのため、研修を「やらされている」と感じたり、「義務だから仕方なく受けるもの」と捉えられたりすることも少なくなかった。

NITSの荒瀬克己理事長は、「教師が学ぶことはもちろん義務だが、一方で子供と同様、本来できなかったことができるようになるのは本当に楽しいことだ」と述べている。教職員にとって研修で学ぶこと自体が、充実感や楽しさを感じられるものであるべきだという考えに立ち、教職員自身が主語となる学びの場を各地で創出していくことこそが、「研修観の転換」だと言える。それはまさに、令和の時代にふさわしい教職員の学びの姿である。

NITSでは近年、「研修観の転換」に向けて2年間にわたり試行錯誤を重ね、その過程で得られた知見をもとに、「参加者（教師）の気づきや変容」を生み出す研修デザインの在り方を全国に向けて提案し始めている。

その中で提唱されているキーワードの一つが「探究型研修」である。これは教職員が自ら問いを立て、自己の在り方を見つめ直しながら探究を深めていく研修であり、NITSではこのような学びを「探究型研修」と呼んでいる。一方的に知識を伝えるのではなく、教職員同士の対話や内省を通して豊かな気づきを引き出し、実践への意欲を高めることを目的としている。また、研修を契機に教職員同士が支え合い、継続的に学び合うコミュニティを形成していくことも重視されている。研修が終わったあとも孤立せず、学びを職場で実践し、共有し続けられるような仕組みを構築することも「研修観の転換」が目指すところである。

私は令和5年度からの2年間、特別研修員としてNITSで勤務し、実践的な学びの場を体験する機会を得た。そこで目の当たりにしたのは、研修の場で教職員が変わっていく瞬間である。

NITSが仕掛ける新たな研修のアプローチは、教職員の内なる成長意欲に火をつけ、「教師が学び続ける文化」の醸成を目指している。

4 探究型研修への挑戦 — 埼玉県での実践

このような研修改革の流れは、埼玉県においても具体的な挑戦として進められている。埼玉県教育委員会では、中央教育審議会の答申やNITSの提案を踏まえ、令和5年度から「新たな教師の学び」を共創するための調査研究を実施している。令和6年度からは県立総合教育センター内にプロジェクトチーム（新たな教職員の学び推進開発ユニット）を立ち上げ、NITSと連携しながら、県内の研究協力委員（小・中・高・特別支援学校の教員）と連携し、2年間の計画で探究的な研修プログラムの作成に向けた調査研究を進めている。

詳しい内容は次号以降で述べたいと考えているが、かつては「研修を受ける側」であった教職員が、「研修を創る側」へ、さらには「学び続ける当事者」へと変わり始めた意義は大きく、参加者自身もその変化に確かな手応えを感じている（一般的には研修を受ける人を「受講者」と呼ぶが、本稿では主体的に学ぶ立場として「参加者」と表記している）。

また、当センターの指導主事にとっても、教職員の变容を間近で目にした経験は大きな学びとなっている。まさに現場から発信するかたちで、「研修観の転換」に向けたチャレンジが、埼玉の地で動き始めている。

さらに埼玉県では、教育研修を支える側の人材育成においても、新たなアプローチが取られている。昨年度より、当センターの所員研修会では、研修担当者である指導主事自身が探究的な学びに取り組む試みが始まっている。このように、県の教職員の学びの中核である研修を企画する立場の教職員自身が探究者となって学ぶ姿勢が、組織の中にも根付き始めている。

研修担当者自身もまた、自ら学び、変わろうとする一人の「教職員」であり、その姿が「研修観の転換」を自ら体現するものとなっている。

5 おわりに

「令和の日本型学校教育」を支える新たな教職員像として、生涯にわたり学び続ける姿が、今まさに求められている。教職員自身が学び、成長し続けることによってこそ、子供たち一人一人の可能性を引き出す教育が実現する。環境整備や制度改革はまだ始まったばかりだが、現場から変化を起こそうとする動きも、たしかに生まれてきている。教職員が研修を通して学ぶ喜びに目覚め、自ら問いを立てて探究を深めていく姿には、未来への大きな可能性が感じられる。

とはいえ、教職員の学びの改革は、まだ道半ばである。新しい研修のかたちを模索する中で、乗り越えるべき課題も少しずつ見えてきた。次号および第3号では、私自身がNITSで経験したさらなる試行錯誤の様子や、今後の研修の在り方について埼玉県の仲間とともに模索している取組を紹介し、この文章を手にとってくださった方々と、「これからの教職員の学び」についてともに考えていくきっかけをつくれたらと願っている。現場の創意工夫や苦心のプロセスを伝えながら、「新たな教職員の学び」の姿を、ともに描いていけたら嬉しい。

飯能高校 × DX ハイスクール ～ Challenge to the next stage ! ～

県立飯能高等学校 校長 矢島 得充



1 はじめに

本校は、魅力ある県立高校づくり第1期実施方策により、令和5年度に飯能新校としてスタートした。目指す学校像を「地域と協働した探究的な学びを通して、社会に貢献できる人材を育成し、生徒・保護者・地域から信頼される進学を重視した学校」とし、これからの社会を生き抜くために必要な力を探究的な学びを通して育成している。

2 取組の経緯

令和5年1月に文部科学省の高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）が策定され、ICTを活用した文理横断的な探究的な学びを強化する学校などに対して、取組に必要な環境整備の経費を支援するといった内容が示された。

これまで本校では、探究的な学びやICTの活用を推進してきたが、更なる推進を図るための一助となることを見込み、本事業への申し込みを行った結果、DXハイスクールの採択校となった。

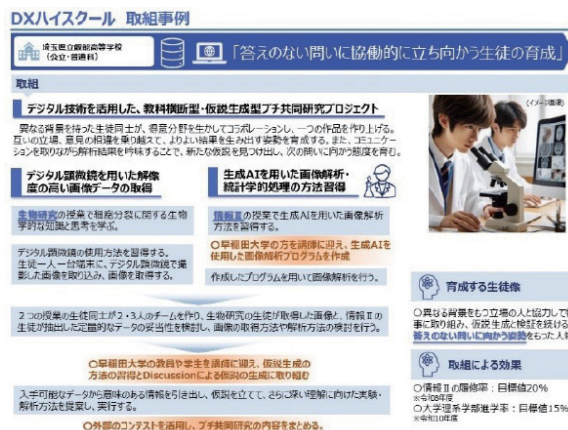
3 取組の内容

令和6年度当初、DXハイスクール採択校として正式に決定したが、実施まで時間的な余裕がなかったため、教科からのアイデアを募集することにした。各教科と意見交換しつつ調整した結果、理科（生物）と情報でデジタル技術を活用した、教科横断型・仮説生成型プッチ共同研究プロジェクトが立ち上がるに至った。

これは、答えのない問いに協働的に立ち向かう生徒の育成を目指したもので、生物研究（3年選択）の授業で取得した細胞分裂に関するデータを、情報Ⅱ（3年選択）の授業でプログラミングを用いて解析し、相互の講座で考察するというプロジェクトである。

特に、情報Ⅱで生成AIを用いる計画であることから生成AI使用上の留意点としてソフトバンク株式会社と、プログラミングを作成することから早稲田大学とそれぞれ連携するなど、企業や大学からバックアップを得ながら事業を進めていくことにした。

本事業では、デジタル顕微鏡を40台及び電子黒板4台を購入する計画を立てた。特に、デジタル顕微鏡の導入について、他校や他県での例はないということもあり、県や文部科学省から注目を集めることとなった。このことから、文部科学省のHPに事例紹介として本校の取組が掲載された。https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/shinkou/shinko/mext_02811.html



【文部科学省 HP に掲載された資料】

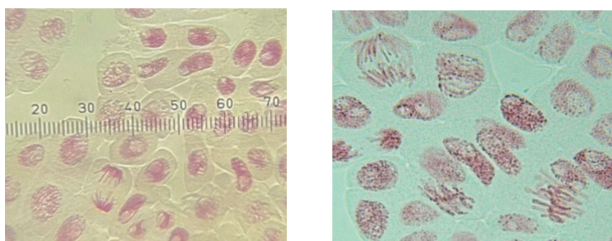
4 具体的な取組

(1) 生物研究

実施した内容

- ①アナログ顕微鏡を用いて画像取得
- ②デジタル顕微鏡を用いて画像取得
- ③得られた画像を、定性的に解析
- ④情報Ⅱへ、細胞の定量的な解析を依頼
- ⑤情報Ⅱからの解析結果をもとに考察
- ⑥考察結果を情報班に共有

デジタル顕微鏡を用いて植物の根端分裂組織の細胞を観察、そして体細胞分裂の画像を撮影し、得られたデータを定性的に解析した。これにより、実験装置に依存するデータ解析の限界を認識し、データの信頼性を重視した科学的思考を身に付けることを意識して考察した。また、情報Ⅱからの定量的な解析結果をもとに、定性的な解析と比較するなど更に考察した。



【アナログ顕微鏡で撮影したもの（左）とデジタル顕微鏡で撮影したもの（右）】

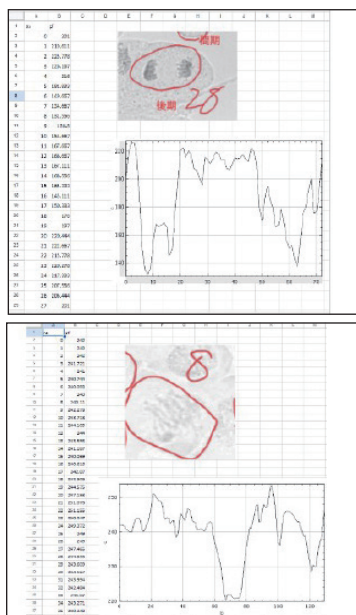
(2) 情報Ⅱ

実施した内容

- ①生成 AI についての基本※ソフトバンクに依頼
- ②生成 AI の活用方法の習得
- ③輝度分布を調べるプログラミング(Image J)
- ④生物研究から、細胞を用いて定量的に解析
- ⑤解析したデータを生物研究に共有
- ⑥解析したデータを考察

生徒が、生成 AI を活用した画像解析プログラムを作成する計画であったが、授業時間数の関係で実施できなかった。このため、早稲田大学のご指導のもと、輝度分布を調べるプログラミングを教員が作成し、これを用いて生徒が細胞に関するデータを解析することに計画を修正した。

情報Ⅱでは、生物研究で得られたデータを基に、プログラミングを用いて輝度分布を調べることで、定量的に解析した。生物研究にこのデータを共有するとともに、細胞の周期により、異なるグラフの形状となることについて考察した。



(3) 考察した内容をアウトプット

それぞれの講座で考察した内容を合わせ、一つのスライドにまとめた。また、電子黒板を用いて成果発表会を行い、生物研究と情報Ⅱで考察したこれらの取組が更に深い理解につながった。

成果発表会は、文部科学省副参事官をはじめ、県教育長や早稲田大学、ソフトバンク株式会社等の方々をお招きし、本校の DX ハイスクールの取組を発信する機会となった。



【成果発表会の様子】

5 おわりに

今回、生徒にとって貴重な研究の機会となった。探究的な学びは PDCA サイクルを回し次の探究につなげるが、本取組は教科を超えて探究のサイクルを回すことで、一定の成果を得ることができた。生徒の感想からは、「デジタル顕微鏡とアナログ顕微鏡の精度の違いもあり、顕微鏡を意欲的に使用してデータを収集できた」「解析は難しかったものの、グラフ等に視覚化された成果物を見て、データ解析への意欲につながった」などの前向きな意見が見られた。

また、本校がこれまで多くの企業や大学等と連携を進め開かれた学校を目指してきたことが、このプロジェクトに企業と大学が関わることに繋がり、予想を超えるプロジェクトになった。

今後も DX ハイスクール採択校として、答えのない問いに協働的に立ち向かう生徒の育成を目指して取り組んでいく。

飯能高校は更なる挑戦を続けていく。

Challenge to the next stage !

令和6年度全国学校体育研究最優秀校（文部科学大臣賞）

運動の楽しさや喜びを味わい、主体的に運動に取り組む児童の育成～体育授業の充実を通して～

本校では、体育授業を中心とした体育的活動を通して、運動の楽しさや喜びを味わい、主体的に運動に取り組む児童の育成に取り組んでいる。本稿では、令和元年度から令和5年度までの研究と実践について概観した。学ぶ必要感をもち、仲間とともに何度も取り組む授業を展開することにより、運動好感度が高まり体力の向上も見られた。今後も効果的な指導方法や単元計画について研究に努めていきたい。

川口市立並木小学校 教諭 福田 宇倫



1 学校の紹介

本校は昭和29年に開校し、今年度開校72年目を迎える。学区にはJR京浜東北線西川口駅東口を含み、駅前の高層マンションや繁華街、住宅街、さらに主要幹線道路が学区内を通っている街中の学校である。通常学級18学級、特別支援学級2学級、児童数584名の中規模校で、10年ほど前から外国籍の家庭が増え、在籍児童の約3割が中国を中心とする外国籍児童である。

2 研究の目的

本校では、長年にわたり体育及び体力向上、健康教育の研究を進めてきた。しかし、子供たちの現状を見るとコロナ禍を経て体力の低下が著しく、特に体力低位層の増加が顕著であった。

そこで、子供たちの課題を解決するため、令和4・5年度に埼玉県体力課題解決の研究指定を受け、子供たちが生涯にわたって健康に過ごせる基礎をつくるための研究を進めることとした。

本研究では、全児童に保障されている「体育授業」を充実させることを要とし、充実した授業を行うことにより体力を向上させるとともに、運動好きの児童を増やすことにより埼玉県の課題でもある運動好意度の向上を目的として研究に取り組んだ。

3 研究の方法・実践内容

(1) 研究の仮説及び手立て

<仮説>

運動の特性や魅力を味わうとともに、学ぶ必要感を感ずることが出来る授業を展開すれば、運動の楽しさを味わい主体的に運動に取り組む児童が育成できるだろう。

手立て1

運動の特性や魅力を味わうことができる教材と教具の工夫

①場や規則・ルールの工夫

運動や領域の特性を捉えた教材を工夫するとともに、分かりやすくシンプルなルールや全員に特性や魅力を味わわせるためのルールの工夫を行った。

守備ゾーンを制限することで、攻撃側のパスコースを生み出しやすくする場の工夫



【4年 ゴール型ゲーム】



【6年 ボール運動】

レシーブはワンバウンドまで可能など、必要な技能のハードルを下げるルールの設定

②ドリルゲームの充実

メインゲームに必要な技能を精選、分析し「勝利、得点、作戦遂行」に必要な基礎的な技術を習得する時間を保証したドリルゲームを設定した。

メインゲームに必要な技能を分析し、分かりやすい言葉やイラストで提示



【必要な技能をまとめた掲示物】

③教具の工夫

教具の機能の中でも、「習得を容易にする」「学習機会を増大させ効率を高める」「制限を加える（条件づける）」の3つの視点に着目し工夫した。

たくさん安定して打つ機会を保障する教具
※ペットボトルの上の部分を取り取って作成したもの



【教具の工夫】

手立て 2

学ぶ必要感を感じることができる学習過程の工夫

④縦軸（一単位時間）での試行錯誤の工夫

45 分の授業の中で試行錯誤しながら課題に向かう学習過程を設定した。

（例）5 年生 ベースボール型での実践



①練習試合
状態の確認
課題の把握

②話し合い
作戦の選択
共通理解

③ゲーム①
作戦を実行
技能の発揮

④話し合い
課題の整理
目標の修正

⑤ゲーム②
対策実行
行動を改善

⑥振り返り
成果と課題
の把握

⑤横軸（単元全体）での試行錯誤の工夫

単元全体を通して児童に学ぶ必要感を感じさせ、主体的に運動に取り組むことを目的に、発達の段階や運動種目の特性を踏まえて様々な学習過程で試行錯誤を工夫した。

ア 毎時間 2 回、メインゲームを設定

1	2	3	4	5	6	7	8
オリエンテーション	メインゲーム①						
	メインゲーム②						

イ 兄弟チームでの練習試合を経て、相手チームとのゲーム

1	2	3	4	5	6	7	8
オリエンテーション	兄弟チームでの練習ゲーム		相手チームとのゲーム		兄弟チームでの練習ゲーム		相手チームとのゲーム

ウ チームごとに課題解決の時間を確保

1	2	3	4	5	6	7	8
オリエンテーション	メインゲーム						
	チームごとの移行タイム						

(2) 授業以外での取組

①朝の運動

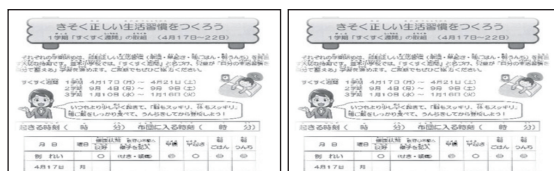
調整力や柔軟性向上の「なみきっ子体操」をはじめ、体力向上と運動好意度向上のバランスを意識しながら、週 2 回全校児童で取り組んでいる。



【なみきっ子体操の一場面】

②「なみきっ子ノート」による取組

毎月の生活目標に合わせて児童個々で目標を設定し月末に振り返る取組、体力向上に関する取組、健康に関する取組等、学校生活上の指針を約 40 ページからなるノートにまとめ活用している。昭和 57 年以降、時代に応じて変化を加えながら本校独自で作成し、家庭との連携を図りながら日常的に取り組んでいる。



【なみきっ子ノートの一部分】

4 研究の成果

(1) 新体力テスト結果

○総合評価 A+B+C の児童の割合は、研究前と比較し 8% 向上し、88.4% となった。

○第 1 目標を 8 項目中 5 項目以上達成した児童の割合が、研究前に比べ 28.2% 向上し、75.9% となった。

(2) 児童の意識調査結果

①「必要感」や「試行錯誤」について

ア 失敗したり、うまくいかなかったりしたら、うまくいくように考えながら運動できましたか。

	R4	R5	伸び
はい	89.2%	94.9%	5.7%

イ 毎時間めあてに向かって何回も取り組むことができましたか。

	R4	R5	伸び
はい	90.6%	92.0%	1.4%

②「運動好感度」について

ア 体育の授業は楽しいですか。

	R4	R5	伸び
はい	93.1%	95.3%	2.2%

5 研究の意義、発展性

(1) 学ぶ必要感や仲間とともに考えながら何度も取り組む授業を展開することにより、運動好意度が高まり、結果として体力の向上もみられた。本研究により、体育授業の充実の重要性を確認することができた。

(2) 運動好意度と体力、両方の向上をねらった体育的諸活動の在り方をカリキュラムマネジメントの視点に立って今後検討することにより、生涯にわたって健康に過ごすことのできる児童を育成することにつながると考える。

『心も体も歯もキラリ』～歯・口の健康から心・体の健康へ～ 生涯にわたる健康意識の向上を目指して

羽生市立新郷第一小学校



1 はじめに

本校は、学校教育目標「自ら考える子」「仲よくする子」「健康でがんばる子」のもと、健康教育において『心も体も歯もキラリ』～歯・口の健康から、心・体の健康へ～を合言葉に学校歯科保健にも力をいれている。

「学校グランドデザイン」をもとに作成した『健康教育グランドデザイン』では、健康教育、歯科保健活動、体力向上、心・食育、学校安全、地域・保護者との連携の7本柱で教育活動全体を通して計画的・継続的に行っている。



2 歯・口の健康に関する取組

(1) 日常の歯科指導

ア 日常での歯みがき指導

1年生の4月に養護教諭が歯のみがき方の指導を行う。指導では「みがく順シート」を児童に掲示し、歯ブラシとワンタフトを使って5分間の歯みがきを行う。その際、歯ブラシのお尻を下げないことや、下の歯の歯ぐきそばに歯ブラシがあたることを意識させている。1年生で

定着した歯みがきスタイルは、高学年になるにつれ自分の歯並びに合ったみがき方に変わっている。

イ ピカいちキラリ【カラーテスト】(年5回)

担任と養護教諭によるピカいちキラリを学期に1回(年3回)、夏休みに家庭の人と1回、11月に歯っぴーファイルに記録を行う1回の年間5回を行い、みがき残しの場所に気付き、そのみがき方を工夫するようになっている。

ウ フッ化物洗口(週1回)

毎週水曜日、健康委員の声を入れた音楽で「右・左・前・全体・歯と歯の間」と歯の根元まで意識して洗口を行い、効果的に実施できている。

(2) 特別活動での歯科指導

ア 学級活動における歯科指導

6月の歯科指導は担任と養護教諭のTTで授業を展開することで児童が主体的、実践的に学ぶ機会を保障している。授業は担任が中心で行い、養護教諭は歯に関する指導を行う。担任が指導を行うことにより日々の歯みがきも共通理解、共通行動での指導ができている。

イ ふれあい歯みがき(1年・学級活動)

歯科衛生士による家族とのふれあい歯みがきでは、保護者に対して歯科衛生士による歯の健康相談を行っている。学校の歯みがきスタイルを保護者と共通理解を行うことで家庭との連携を図っている。

ウ キラリ集会(1・6年のペア学習)

6年生が歯科についてのプレゼン発表を行う。集会では歯の役割に注目しワークシートに歯の形の紙を貼る、第一大臼歯を見つける、お菓子の付いた歯を見つける、歯に関するクイズに答える等ペアで学習を行い、楽しく知識を吸収している。

※6年生は、事前学習を総合的な学習の時間(6時間)で行っている。

エ 学校歯科医による歯科指導

臨時歯科健診後には、歯みがきのポイント、

外傷時の対応、健康な歯のサイクルなど5年生へ学校歯科医による歯科指導を行う。

(3) 児童健康委員会の取組

目標：健康委員が手本となってニコニコな心、ピカピカな歯を伝えて広げる

ア オールピカいちカレンダー

歯みがきチェックの他、心や体の健康も確認できるように、保健・歯・食に関する項目について1週間の生活の振り返りを行っている。これにより歯・口の健康から心・体の健康につなげることができている。

イ 健康フェスティバル

病気やケガ、食についてなど毎年テーマを決め、全学年が健康についてのクイズや体験をしながらの学びを深めている。

(4) その他

ア 10年後の自分にに向けたメッセージ

6年生が、歯科指導で大人になっても健康な歯を維持するためにできることをまとめた模造紙の周りには、10年後の自分にに向けたメッセージを掲示する。メッセージカードは、卒業時に渡す成長の記録に貼り付けてプレゼントしている。

イ いい歯チャンピオンといい歯チャンピオン Jr. の認定

健康な歯を維持した児童がアンバサダーとして下級生の認定を行い、健康な歯の維持のために活動を行っている。

ウ 職員研修

4月には転入職員に向け研修を実施するとともに、全職員を対象にフッ化物洗口の仕方、歯の外傷時の対応、保存液の使用法や保管場所の確認を行っている。

エ 家庭・地域との連携

地域学校保健委員会や家庭と連携した取組を行う他、羽生市やPTAより入学祝いとして歯みがきセットや指導用資料等の提供があるなど地域に支えられた指導を行っている。

オ 食育指導

給食の献立表にあるかみかみメニューを紹介し、6月や11月には「かみかみ30」として30カウントして食べる等、咀嚼を意識した指導を行っている。5・6年生では、家庭科の時間に事前学習を行い、お弁当の日に歯によいお弁当づくりに取り組んでいる。

カ 指導用資料の工夫

児童の実態を図にした「永久歯地図」、「むし歯地図」を作成している。



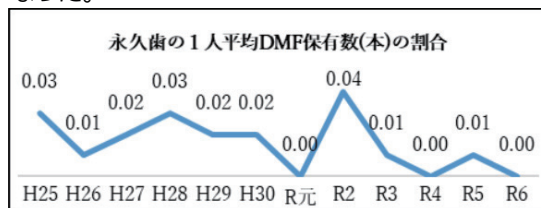
【永久歯地図】

3 成果

これらの取組により4つの成果がみられた。

- (1) 発達段階に応じた歯・口の健康に関する**確かな学びと自分の歯・口に合わせた歯みがき**（日常の歯みがき指導の積み重ね）を身に付けることができた。
- (2) 健康委員会や高学年の一人ひとりが**主体的となり、周りに伝えて広げる活動を楽しみながら行っている**ことで、他学年にも伝統として受け継がれ、全校児童の健康への関心意欲を高めることができた。
- (3) 歯・口の健康に留まらず、**歯・口の健康をきっかけに心や体など全身の健康維持**につながるように取り組んでいることで、健康意識の向上につなげることができた。
- (4) **歯・口の健康を生涯にわたる健康づくり**と関連させ、「ずっと守り続けたい」という自ら進める健康づくりをめざせるようになった。

これらの取組により、本校のDMF歯数の数値を低い状態のまま維持することができるようになった。



4 まとめ

これらの実践は、これまで本校が健康教育に継続的、積極的に取り組んできた成果である。保護者・地域、学校医の先生方の協力や、「チーム新一」として職員の共通理解、共通行動のもと指導にあたってきたことで児童の健康への意識が最高に高まってきた。

今後も自己の健康の保持増進と歯・口の健康から全身への健康を意識した健康教育に取り組むことで生涯にわたる健康意識の向上を目指したい。

自由進度学習において、「深い学び」にいたるための 授業者の役割とはどのようなものだろうか

～公民的分野「私たちと国際社会の諸課題」の授業実践より～

新座市立第五中学校 教諭 **橋本 一秋**



1 はじめに

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す学習スタイルとして、自由進度学習が広まりつつある。一方、自由進度学習と自習の違いの理解が進んでいないこと、ファシリテーターとしての授業者の役割が未だ不明瞭なことから、「深い学び」は困難という声もあり、実践に踏み切れない現場の実態もある。本稿では、第3学年公民的分野「私たちと国際社会の諸課題」で試みた自由進度学習における、「深い学び」にいたるための授業者の役割について、表題の問いに答えたい。

2 実践事例

(1) 単元計画

本単元は、教科書の第5章2節「さまざまな国際問題」にあたる五つの小単元（計12ページ）からなる中単元で、5単位時間で構成している。五つの小単元で取り扱っている国際問題は「地球環境問題」「資源・エネルギー問題」「貧困問題」「新しい戦争」「難民問題」である。これを探究的な学習と知識構成型ジグソー法を組み合わせた自由進度学習で進めていく。

(2) 第1時 課題の設定

学級単位で設定する。学級の一つは、第5章を貫く学習問題を「持続可能な社会を実現するために、私たちにできることはどのようなものだろうか」とした。これを踏まえて第2節を貫く学習問題を「五つの国際問題は、どのようにつながっているのだろうか」と設定し、仮説を立てる。学習問題の設定を、個人ではなく学級としているのは、学び合いを効果的にするためである。また、自由進度学習の活動を1枚にまとめた図1のワー

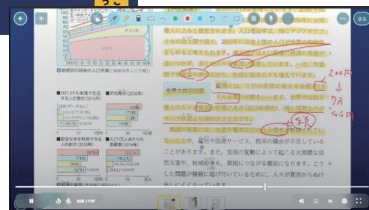
クシートを配信し、見通しをもつ。

五つの国際問題は分担して探究する。用意した図2の資料を活用して、関心に応じて選ぶ。一斉講義に代わるものとして、授業者自ら全単元で図3のような解説動画を制作し、Google Classroomに掲載している。担当する国際問題が決まったら、生徒一人一人が学習課題を設定し、解決するために必要な情報を問いの文言で書き出していく。こうして生徒は、大単元（章）、中単元（節）、小単元（国際問題）、収集する情報について、それぞれ問いを立てることになる。このとき重要なことは、この問いが関心に応じたものというだけでなく、教科書の内容に則っているものであること、そして後述するように「社会的な見方・考え方」が働くものになっていることである。



【図2】「難民問題」の動画のWebカード、新聞記事等の資料

【図3】「貧困問題」の解説動画



(3) 第2・3・4時 情報収集と整理・分析

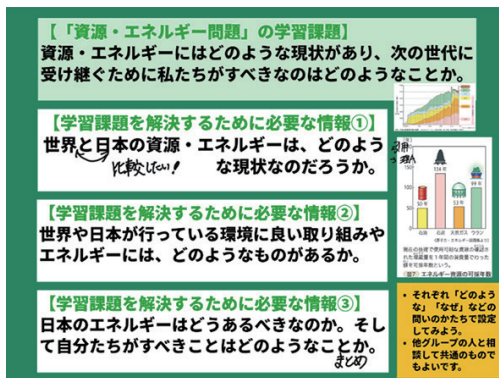
各自で設定した学習課題を解決するために必要な情報を収集し、整理・分析しながらグループ内で共有する。図4が、ある生徒が個人で設定した「資源・エネルギー問題」の学習課題と、これを解決するために必要な情報である。この情報もまた、問いの文言で表現している。この生徒は、他教科と結びつけながら、単元全体を見通して計画を立てることができている。

学習課題の解決も必要な情報の収集も、問いに答えようとすることで「社会的な見方・考え方」が自動的に働く文言になっていることに注目したい。「どのような」に答えようとすることで、資源・エネルギー問題の



【図1】活動のすべてを1枚にまとめたワークシート

実態についての知識が習得される。同様に「なぜ」によってその背景を考察する力が育成される。これらを土台にして「どうあるべきか」と自ら問うことで、社会課題について複数の意見や立場を踏まえて選択・判断する。こうした、社会科を学ぶ本質的な意義に迫るための問いの立て方については、繰り返し授業の中で取り組むことで、生徒が身に付けることができる。



【図4】「資源・エネルギー問題」担当生徒が設定した学習課題

「社会的な見方・考え方」が働く問いの例については、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会社会・地理歴史・公民ワーキンググループ第14回（平成28年6月13日開催）配布資料「社会的な見方や考え方（追究の視点や方法）の例（案）」が参考になる。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/071/siryo/1372399.htm

図5の収集した情報は、授業の終わりに必ずグループ内で共有し「五つの国際問題は、どのようにつながっているのだろうか」の問いに戻って、適切な活動ができているか意見交換する。学習問題を学級単位で設定しているため、効果的な学び合いになる。

(4) 第5時 まとめ・表現



【図5】「資源・エネルギー問題」担当生徒が収集し、整理・分析した情報。教科書の他、新聞記事、インターネットや生成AIも活用している。

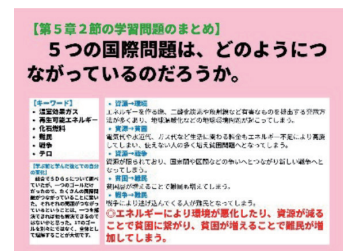
収集した情報を、15分程度の時間で図6のワークシートで整理・分析をしながら、五つの国際問題のつながり

を見える化する。見える化する過程そのものに学習効果があるため、グループ内で話し合い協力しながらも、一人一枚作成する。

このワークシートを使いながら、一人2分の全員発表を行う。全員発表とは、5人グループの代表者が隣のグループへ発表する活動を5ターン行うことで、合計15分程度で学級全員が発表できるという学習活動である。図6では地球環境問題と難民問題のつながりが示されていないが、全員発表の活動で補完されることを期待している。発表後、意見交換を踏まえて図7のワークシートに学習課題のまとめと振り返りをする。なお、図6と図7が本単元の評価材料となる。



【図6】見える化された五つの国際問題のつながり



【図7】第5章2節のまとめと振り返り

3 おわりに

本実践を踏まえ「深い学び」にいたるファシリテーターとしての授業者の役割として、次の三つを提案する。

- ・問いを「社会的な見方・考え方」が働くものへと促し、社会科を学ぶ本質的な意義に迫る。
- ・大単元と中単元の学習問題を学級単位で設定させ、学び合いを効果的なものにする。
- ・5単位時間の活動を1枚にまとめたワークシートを配布し、単元全体の見通しをもたせ、計画に生かす。

本実践では、自由進度学習とはいえ授業者の設定するフレームが狭く、生徒の学習活動の自由度は高くない。「深い学び」にいたる自由進度学習を、より広いフレームで実現するためには、本稿で提案した授業者の役割を、生徒自身が学習に自覚的に取り入れることが必要である。特に「社会的な見方・考え方」を道具のように自在に働かせる学習者でありたい。そのためには中学校の3年間、または小学校第3学年からの7年間の計画的な指導・支援が必要であると考えている。

「発信技能を高める」授業づくりの実践 ～学習意欲を高め、英語好きな生徒の育成を目指して～

坂戸市立浅羽野中学校 教諭 おおき あおい 大木 葵



1 はじめに

本校は坂戸市に所在する田畑に囲まれた自然豊かな学校である。入学してくる生徒は、9割以上の生徒が中学校から徒歩5分圏内に所在する同じ小学校出身である。その小学校では、英語専科の先生が外国語活動を担当しているため、小中連携の取組や、児童・生徒の情報・活動の共有もしやすい環境にある。

外国語教育において、小中連携は非常に大切だと考える。小学校での外国語教育を通して、音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度など、一定の素地が育成されることを踏まえ、中学校でのより幅広い活動を通して、学習意欲のさらなる向上に繋げていくことを大切に外国語教育の充実を図っている。

2 テーマ設定の理由

令和5年度全国学力・学習状況調査では、「書くこと」の正答率が24.1%、「話すこと」に関する平均正答率が12.4%にとどまり、発信技能に課題があることが分かった。本校の調査結果も同様、全国平均正答率を上回ったものの、発信技能である「書くこと」「話すこと」に課題がある。

英語の発信技能を高めるためには、生徒の「もっと話してみたい」「書けるようになりたい」など、意欲の向上につながる活動を取り入れることが大切である。そこで、即興で伝え合う活動や相手との関係性を意識し、目的・場面・状況に応じた活動など、生徒一人一人が積極的に学びに向かう実践を行おうと考え、本テーマを設定した。

3 実践内容の紹介

(1) 相手を意識した「話すこと」の指導

教科書の内容理解後のRetelling活動に目的を持って取り組ませている。Retellingとは、教科書本文を読んだ後、内容を自分の言葉で再構築して話す活動のことである。理解した内容を再び話すことで、理解度を深め、「どのように伝えたら相手に伝わるかなど、表現を工夫する力を養うことができる。

本校では、単元末の目標としてALTと1対1で行

うRetelling活動を実施している。その活動までの流れは、主に以下のステップで指導をしている。

- ①絵をもとに、説明に必要な単語や表現を抜き出す。必要があればデジタル教科書を使って内容の再確認を行う。(個人)
- ②絵と単語や表現を用いて、教科書本文の内容を再構築する。(個人)
- ③話し手と聞き手にわかれてRetelling活動を行う。(ペア)
- ④中間指導を行う。
- ⑤相手を入れ替えて③の活動をくり返す。



【写真：帯活動でRetellingを行っている様子】

Retellingの活動を1時間行った後の授業では、Retellingテストの日まで、帯活動の中でRetellingを実施している。単元ごとに三つのRetellingパートがあるので、以下のようにすべてのパートをペアで実施するよう指導している。

- ①じゃんけんで勝った人が、相手のRetellingパートを決める。
例) Part 1, please.
- ②じゃんけんに負けた人が勝った人のパートを決める。
例) Part 3, please.
- ③ペアで行わなかったパートを2人で確認する。

③の活動を行う際は、日本語を使っても良いこととしている。相手の良いところは吸収し、適切な助言を与える活動を重ねる中で、生徒が自信をもってテスト当日をむかえることができるようになってくる。また、Retelling活動以外にも1分間Q&Aや自

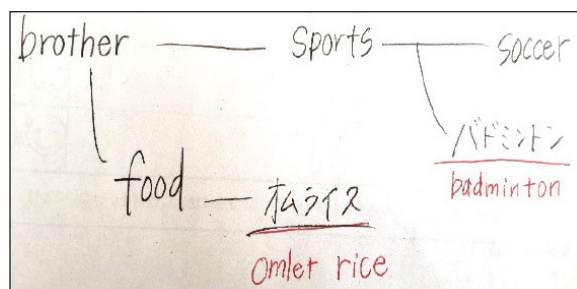
由に対話する時間など、ALT と 1 対 1 やグループで活動をする時間を取り入れている。

(2)「話すこと」→「書くこと」の指導

英語で話すことはできても、書くことができない単語や表現を減らしていくため、帯活動の一つとしてインタビュー・マッピングを取り入れている。インタビュー・マッピングとは、相手から聞いた情報を整理し、単語や短い語句で関連付けながらメモをとる活動である。身近な話題や出来事など、相手の情報を書いたマッピングのメモ→英文を書くことに繋げることで、「書くこと」に対する苦手意識の軽減に繋げることができる。主に以下のステップで活動をしている。

- ①テーマについて 2 分間やり取りをしながら、マッピングに相手の情報を書く。(ペア・個人)
- ②マッピングに英語で書くことができなかった単語や表現を調べ、書き足す。(個人)
- ③マッピングをもとに、相手から聞いた情報を英文で書く。(個人)
- ④書いた表現を共有し、より良い表現になるよう話し合う。(グループ)

活動で記入したワークシートが増えるごとに、今までの自分と比較し、学びの変容に気付くことができる。また、ワークシートではなく、ICT 端末を用いることで、好事例を画面で共有したり、個別に支援がしやすくなったりする他、活動の最後に Dictation 活動を取り入れることもできる。



【活動②：マッピングのメモ】

(3) 小中連携を意識した指導

小学校と中学校の取組を共有したり、互いの授業

に参加したりすることで、目的・場面・状況などに応じて、表現したり伝え合ったりする取組ができる。

ア パフォーマンステストの実施

学期末に行うパフォーマンステストを、小学校の先生参加型で実施した。準備の段階から、小学校の先生が授業に来ることを伝えていたので、「成長した姿を見せたい」と、今まで以上に意欲的に活動に取り組む生徒が多かった。全員の発表後には、スペシャル賞という形で数名の生徒の良かった点を小学校の先生に発表してもらった。当日来ることができなかった先生には、動画を共有した。

イ 出前授業の実施

小学校卒業期の授業に参加した。例年、入学時に中学校の先生や授業に対する漠然とした不安を抱えている生徒が多く、その生徒の割合軽減を目的とした取組である。中学校に関するクイズや学校紹介動画など、児童が興味を持って授業に参加してくれた。中学校の生徒も、部活動紹介動画の原稿づくりに意欲的に取り組んでおり、小中どちらにとっても良い効果があると考えられる。



【小学校での出前授業の様子】

4 おわりに

これらの実践を通して、生徒がいいきと活動する様子が多く見られるようになった。一方、「英語の授業は好きだけど、英語は苦手」と発する生徒もあり、技能の定着には至っていない面もある。

「教える」の語源は「愛しむ」と言われている。どの生徒も誰一人取りこぼさず、学びの楽しさを味わうことができるよう、私自身も研鑽を積んでいく所存である。

「図画工作は楽しい！と感じてもらうために」

～自分で考えてつくりだす喜びを味わうような授業展開の実践～

蓮田市立蓮田中央小学校 教諭 なかむら えみこ 中村 恵三子



1 はじめに

昔、先生から「図画工作という教科がなかったら、みんな同じ服を着て、同じ物をもって生活していたかもしれないね。」と言われたことある。図画工作があるから、色々なデザインの服や物があり、生活が豊かになっている。そう考えると、図画工作は素晴らしい力を持っているんだなと思った。だから、私は子供たちが自分で考えてつくりだす喜びを味わうような授業展開を実践し、図画工作は楽しいと感じてほしいと思っている。

小学校学習指導要領解説図画工作編では、「学びに向かう力、人間性等」の目標として、「つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を想像しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。」と示している。このことは、児童自身に本来備わっている資質・能力を一層伸ばし、表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す観点に立っている。

そこで本実践では、見たり感じたりする力、次にどのような形や色にするかを考える力、それを実現するために用具や表し方を工夫する力、一度つくったものを改めて見て、新たなものをつくりだそうとする力を育て、つくりだす喜びを味わうような授業展開を行い、子供たちの表現方法の幅を広げることができる児童の育成を目指した。

2 実践内容

(1) 造形活動

素材を理解し、表現したいイメージに沿って形を変化させながら、手や体全体を使って、思いついたことに取り組みながら楽しむことができる活動である。グループで活動することが多く、活動を通してお互いの活動を見せ合ったり、一緒にしたりすることで造形範囲が広がったり、図画工作が楽しいと感じたりすることができる大切な活動である。また、友達関係が深くなったり広がったりもする。



【第2学年 新聞紙とあそぼう】

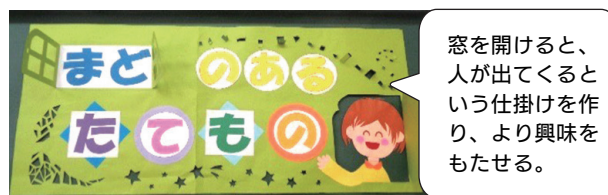
子供たちが新聞紙をちぎったり、ねじったり、丸めたりして新聞紙のさまざまな変化を五感で感じ、思いついた活動や表し方を試していく造形遊びである。ちぎった新聞紙を上に向けて一緒にジャンプしたり、新聞紙の下にかくれたりして素材の感触を楽しみながら活動している。

(2) 導入の工夫

ア 児童の興味を膨らませ、意欲を引き出すために、導入を丁寧に行う。

○題材の紹介するときの題字の工夫

その時間に使う技法や材料を取り入れて題字をつくり、児童の興味や関心をもてるようにする。例えば、カッターナイフを使う場合、どんな切り方ができるか色々な例を題字に取り入れる。



【カッターナイフを使った題材】

○題材の世界へ引き込むために、児童と対話しながらイメージを膨らませる。例えば、不思議な乗り物をかく場合、どんなものが乗り物になったらいいか、またその乗り物に乗ってどこに行きたいかなども詳しく発表させ、そ

の乗り物の世界に入り込めるようにする。実際にその道具を用意して、どんな乗り物に変身できるか動かしてみながら考えてもよい。また、教師が役者になって魔法をかけるふりをして材料を変身させても面白い。

イ 色々な技法の紹介

表現方法の幅が広がると、どのやり方を使うか、どのように組み合わせるかなど表現方法の幅も広がり、楽しく活動に取り組める。



【色々な技法の例や組み合わせ方などの紹介】

実際に、児童の前で実演しながら説明すると、分かりやすい。やり方の動画などもあるので、見せながら行うのもよい。

(3) 安全指導

用具は、材料とともに造形活動にはなくてはならないものである。児童自らの思いを実現させるために、用具の正しく安全な使い方を知ることは大切なことである。毎時間、確認をしてから授業を行っていく。

(4) 鑑賞方法

ア 鑑賞カードを使う。

自分の作品の写真を貼ったり、友達の作品や自分の作品の感想を記入したりしたワークシートを使い、作品集として残す。

イ つくった作品で一緒に遊ぶ。

友達と対話しながらイメージを膨らませ、楽しく鑑賞することができる。

ウ 作品をつなげたり、組み合わせたりする。

作品をつなげたり、置き方を工夫したりして大きな一つの作品にすることで、世界が広がり、作品の見方が変わってくる。

(5) 他教科と関連づけた作品づくり

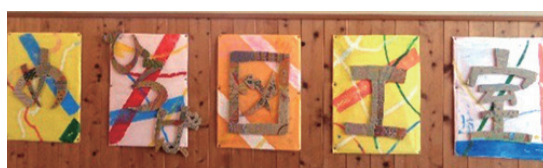
国語の教材と関連させて作品づくりを行うと、その世界に入りやすく、児童も楽しみながら活動できる。



【第2学年 国語「スイミー」】

(6) 図工クラブの活動

学級や学年が異なる仲間と協力しながら、図工を通して学校生活を豊かにする。どんなものをつくるか、どんなデザインにするか話し合いながら取り組むことで、表現の幅が広がる。



【図工室の看板づくり】



【昇降口の壁画づくり】

3 おわりに

「図画工作が楽しい!」と感じてもらうためには、色々な角度からアプローチをすることが大切だと思う。図工で作品をつくりだすためには、それまでの経験が大きく関わってくる。しかし、どの子も図画工作の経験が豊富なわけではない。絵の具で色を塗るといったとき、絵の具の筆だけでなく、歯ブラシやスポンジ、ローラーなど色々な塗り方を知っていれば、表現方法も広がってくる。だからこそ、低学年のころからいろいろな経験をさせていくことが重要である。

時に、私が考えていなかったような表現方法を思いつく児童もいて驚き、嬉しくなることがある。また、今まで、図画工作が苦手だった子が造形活動を行い、友達と活動して楽しかったということがある。そういう児童の思いを大切に、自分が考えてつくり出す喜びを味わえるような授業をこれからも行っていきたい。

参考文献：小学校図画工作作品アイディア集 図工人

<https://zukoujin.com/>

小学校学習指導要領解説 図画工作編

児童が数学的な見方・考え方を働かせることを目指した算数指導 ～三角形と四角形の求積における児童の困難性に着目して～

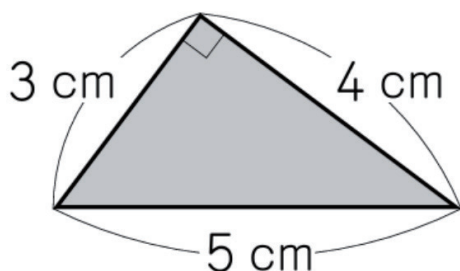
本校では第5学年「面積」の学習に焦点を当て、全国学力・学習状況調査や入間地区算数・数学科学力調査から、児童が抱える困難性を明らかにした。そして困難性を解消するための指導の改善案を考え、実践した内容を示した。児童が抱える困難性を意識することで、数学的な見方・考え方を働かせながら問題解決をする児童の様子が見られた。

入間市立金子小学校 教諭 さいとう ゆうすけ 齊藤 雄佑



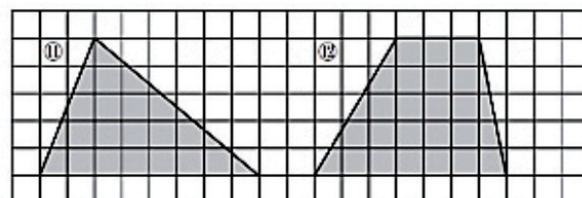
1 はじめに

小学校学習指導要領解説算数編（文部科学省、2017）では、第5学年B（3）の平面図形の面積において、「図形を構成する要素などに着目して、既習の求積可能な図形の面積の求め方を基に考えたり、説明したりすることが大切である」（p.257）と示している。つまり、本単元では児童が図形を構成する要素などに着目する「見方」と、既習を基に考える「考え方」を働かせることが重要であることが分かる。しかしながら、このような数学的な見方・考え方を働かせることについては児童にとっての困難性があることが調査から伺える。例えば、令和3年度の全国学力・学習状況調査で出題された（図1）三角形の求積における小学校6年生の正答率は55.4%であった。誤答から、水平な辺を底辺としたり、示されたすべての辺に着目したりする児童の実態が明らかとなった。



【図1 全国学力・学習状況調査（文部科学省，2021）】

また、令和5年度の入間地区算数・数学科学力調査（埼玉県入間地区で70年間続く、小学校2年生から中学校3年生までを対象とした調査）では、三角形と台形の求積が出題された。（図2）正答率はそれぞれ三角形が67%、台形が52%であった。台形は公式を記憶していなくても三角形の2つ分と考えれば求積が可能である。しかし正答率は15ポイント下がっている。このことから、台形の求積公式を記憶していない児童が三角形に分割して解決しようとしていない可能性が考えられる。



【図2 入間地区算数・数学科学力調査（入間地区算数数学教育研究会，2023）】

2 取組について

第5学年の平面図形の面積において数学的な見方・考え方を働かせることに焦点を当てた時、一般的な指導には二つの問題点があると考えられる。1点目は方眼の上にのった図形を提示することである。方眼の上に図形をのせることの利点は、底辺と高さを見つけやすかったり、変形をしやすかったりすることだと考える。一方で、底辺と高さがある特定の場所に限られやすく、求積に必要な要素を児童が見出す活動にはなりにくいと考えられる。2点目は平行四辺形から導入することである。平行四辺形から導入することの利点は既習の長方形に変形しやすいことであると考えられる。一方で、単元全体を見通すと、平行四辺形から導入した場合、三角形は平行四辺形の半分とし、台形は平行四辺形に変形したり、対角線で三角形に分割したりして解決していく。つまり、変形や分割の仕方が様々になる。これは算数の学習に苦手意識を持つ児童にとっては、既習を基に考える考え方を困難にさせていると考えられる。そこで、本単元では児童が図形を構成する要素に着目して、既習を基に考えることができるようにするために二つの改善を行う。

- (1) 図形を方眼にのせず、底辺を決めて高さを考え、必要な長さを実測する活動を取り入れる
- (2) 三角形から導入する

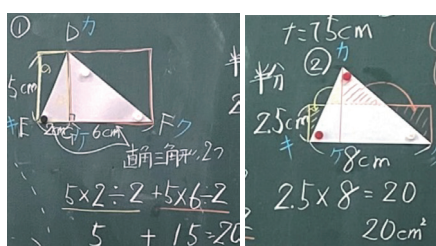
3 本単元の学習展開

第1、2時 三角形の面積

既習の図形を提示し、まだ面積を求めている直角三角形に焦点を当て、面積が求められるか問うた。児童の「辺の長さが分からないと求められない」と

いう発言から、面積を求めるのに必要な長さは自分で測ることを指導した。【改善(1)】児童は直角三角形は長方形の半分であることを根拠にして直角三角形の面積を求めた。

直角三角形で使った考え方で「普通の三角形（一般三角形）も求められる」といった児童の発言を取り上げ、共有した。そして、一般三角形では直角三角形二つ分とみる考え方【図3】と、等積変形して長方形とみる【図4】考え方を取り上げ、未習の図形も既習の図形とみることで面積を求めることができることをまとめた。

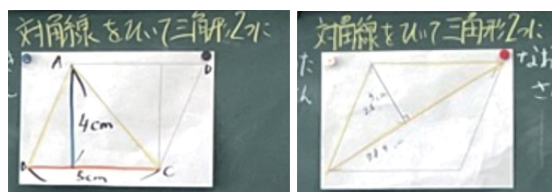


【図3】

【図4】

第3時 平行四辺形の面積

平行四辺形では児童は対角線で二つの三角形に分割する考え方と等積変形をして長方形にする考え方で求積した。対角線で分割した考え方に着目させ、水平な辺を底辺とする見方【図5】と対角線を底辺とする見方【図6】を比較させた。水平な辺を底辺とすると高さは平行な2辺の間を測ればよいと見やすい、というよさがあるということが話し合われた。



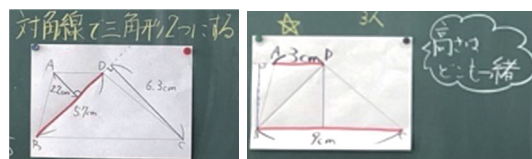
【図5】

【図6】

第6時 台形の面積

台形の求積では対角線で三角形に分割する考え方のほかに、倍積変形して平行四辺形とみる考え方、直角三角形と正方形にする考え方等、多様な考え方で解決していた。測る箇所を数をできるだけ少なくしたり、図形の性質をうまく使ったりすることに着目した児童の発言を取り上げ、その視点でみると、三角形に分割する考え方と倍積変形をして平行四辺形にする考え方がより簡潔であることが共有された。また、対角線を底辺とする【図7】と高さを2か所測る必要があるが、水平な辺を底辺とする【図8】と平行の性質を活用し、1か所測るだけでよいという

気づきも見られた。



【図7】

【図8】

第8時 一般四角形の面積

一般四角形の面積では児童は対角線で三角形に分割し、自ら底辺を決め、高さを測定して求積していた。

4 考察

図形には方眼も数値もないため、児童は図形を構成する要素や位置関係、図形の性質に着目し、面積を求めている。【図9】

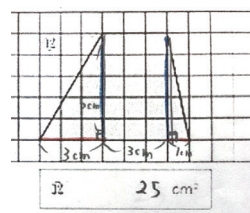


【図9 底辺を決め、高さを測定する姿】

また、事後調査問題では、台形の面積を求める公式を記憶していない児童も求めることができる図形に分割して面積を求めようとする態度が見られた。【図10】

また、児童から「結局どんな図形も三角形にすれば求められる」といったこれまでの学習を振り返り、統合しようとする姿も見られた。

一方で、三角形で導入されても、台形の求積では各々変形や分割しやすい図形にする様子も見られた。多様な分割の考えは認めつつ、三角形に分割するよさを味わえるようにすることが今後の課題である。



【図10 事後調査 台形の求積】

5 おわりに

本稿では児童の困難性に着目し、数学的な見方・考え方を働かせるための指導の改善について述べた。今後も目の前の児童が抱える困難を分析し、考える楽しさや分かる喜びを味わえる授業づくりをしていきたい。

引用参考文献：文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説算数 編，日本文教出版。文部科学省（2021）令和3年度全国学力学習・状況調査報告書小学校算数、入間地区算数数学教育研究会（2023）入間地区算数・数学科学力調査報告書

「主体的・対話的で深い学び」について 授業者として思うこと

県立本庄高等学校 教諭 あんざい ゆか 安齋 由佳



1 はじめに

本校は、大正11年（1922年）に県内6番目の県立中学校である埼玉県立本庄中学校として開校し、昭和23年（1948年）には、「埼玉県立本庄高等学校」として新たな一歩を踏み出した。今年で創立104年目を迎えた歴史と伝統のある学校であり、生徒数は961名である。「目指す学校像」に、「活力ある進学校」を掲げ、次の3点を重点目標として、教育活動を展開している。

1 日常の授業で生徒を支える学校づくりと質の高い学びの実現

2 学校行事及び部活動を通じた活力あふれる学校づくりと第一志望進路を実現する進路指導

3 情報発信・外部機関連携及び姉妹校交流を通じた、地域・世界に開かれた学校づくりの推進

「われらは世界と共にあり」誇るべき校歌の一節にあるように、広い視野と豊かな国際性を育み、持続可能な社会に生きる人材の育成に取り組んでいる。

2 重点目標1「日常の授業で生徒を支える学校づくりと質の高い学びの実現」に向けた本校の取組

昨年度、本校では麻布教育研究所の永島孝嗣氏による「組織的な授業研究・改善に向けた教員研修会」が実施された。研修会では、二つの観点 ①授業研究の在り方：授業研究は、授業者のスキルアップを目的とするものではなく、日常の授業において、参観者の「見取り（生徒の学習状況・状態を見て取る）」トレーニングを目的とするものであり、授業の専門家として発達段階を少しでも上げていくためのもの ②授業づくりの考え方：授業は、教員による10%のクリティカルなアドバイスと90%の生徒の自習（人のペースで人から学ぶのではなく、教材から学ぶことを仲間と支え合う）について触れられていた。

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善が求められるなか、本校では、生徒の学びを支える授業の3要素として、①安心して臨める授業であること、②授業中、先生に大切にされていると感じること、③授業中、仲間に大切にされていると感じること にフォーカスした健全なコミュニケーションの場としての授業をデザイン

ンすることが強調されている。

3 授業実践（50分×2コマ）

どの教科でもいえることだが、授業で学んだことを「生きた知識」として自分自身の生活や人生に活かしてほしいという授業者としての願いがある。それには、主体的・対話的で深い学びへと深化させる授業実践が伴わなければならない。2で述べた本校の取り組みと照らし合わせ、生物基礎 単元「免疫」学習後のアクティビティとして「HPVワクチン接種」について扱った授業を分析してみた。

(1) ねらい

① 主体的・対話的で深い学びを通じて、自分自身の考えが授業前後でどのように変化するかを実感し、その体験から確かな学びをする意義と楽しさを知ること

② 情報を適切に扱い、自分の考えの根拠となる科学的思考力・表現力を磨くこと

③ 学びを通じ、一市民として行政への関心を向上させること

(2) 課題（授業前後で同じ回答）

Q1 あなたは、HPV ワクチン接種をしますか？

Q2 親になったとき、自分の子どもに接種をすすめますか？

ワクチン接種について生徒が考える立場として、①男女共通の課題（授業のはじめに男性にもワクチン接種があることに触れた）②自分自身の課題 ③生徒が親になった時の課題 の3視点を設定した。

(3) 授業展開

(ア) 5分間の話し合い、タブレットを活用したリサーチ → (イ) 【授業前】課題への回答・集計結果表示 → (ウ) ペアワークで子宮頸がんワクチンに関する調べ学習 → (エ) 調べ学習の内容をクラス全体で確認 → (オ) 【授業後】課題への回答・集計結果表示 → (カ) 生徒の住む市町村ごとの小グループをつくり、課題についての考えをシェア 考えが科学的か（授業で学んだことが活かされているか）を自己・他者評価 → (キ) 市町村のHPを閲覧し、制度やHPの記載の仕方など市民としてのフリートーク・記述

(ア) のポイント

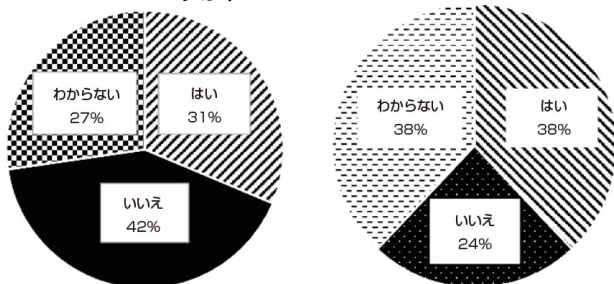
私たちが日常生活において、HPV やインフルエンザ ワクチン接種を決める際、親や友人とのやりとりやスマホなどでの情報収集が考えられ、深刻な場合を除き比較的短時間で決める傾向にある。この時間はそれを体現するので5分間とすることを生徒に伝えた。

(イ) のポイント

生徒の回答は、リアルタイムで集計、ホワイトボードに結果表示した。5分間では回答できないと焦る生徒がいる中で、集計表示は、生徒の回答を促す効果がある。一方、結果を見ることで考えが影響されること、時間内に回答しない生徒がいることは自然である。この点を時間内に自分の考えが定まらなかった生徒も安心して引き続き授業に取り組めるよう生徒に伝えた。

【授業前】

回答結果 Q1 あなたはHPV ワクチン接種をしますか？ Q2 親になったとき、自分の子供に接種をすすめますか？



(ウ) のポイント

ここで言うペアワークは、生徒が「Think-Pair-Share」をできる状態をいう。日常的に活用しているアクティブラーニングの手法であり生徒には浸透している。移動も自由であり、何で調べてもよいが、社会性の醸成の観点からタスク達成（指名されたら答えられる状態にしておく）を徹底している。

調べ学習の質問例：

- ・子宮頸がんを引き起こす病原体（抗原）は？ どのような症状か？
- ・検査方法は？ 治る可能性（生存率）は？

(エ) のポイント

前段階の活動やその解が不完全であることをよとする授業もあるが、本授業では、正確な情報をもとに、次の（オ）の活動に進めることが望ましい。指名された生徒が調べ学習の結果を答えクラス全体で確認を行った。セルフワーク→シェア→答え合わせの流れはシンプルであるが大切だと考える。シェアを入れずにタスク達成（指名されたら答えられる状態にしておく）を強いるのは生

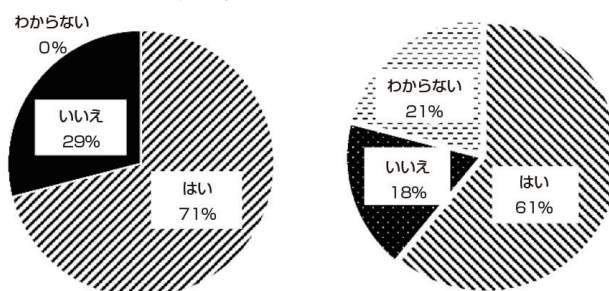
徒にとって大きな負担である。対話の時間を取ることは、間違えを恐れずに安心して自分の考えを探究することにつながる。

(オ) のポイント

今回、授業前後で回答に大きな変化があった。ねらい①の確かな学びの意義と楽しさを感じてもらえたかは生徒の様子から見取ることができた。

【授業後】

回答結果 Q1 あなたはHPV ワクチン接種をしますか？ Q2 親になったとき、自分の子供に接種をすすめますか？



(カ) のポイント

「ディベート」と「多面評価（360度評価）」を組み合わせた活動である。次の（キ）に繋げるために事前に用意しておいた市町村ごとのグループに分かれて行った。授業者は生徒が科学的と判断する基準を見ることで、生徒一人一人がこれまでの授業で十分な知識の理解・定着が図れていたのか、それは「生きた知識」になっているのか見取することができる。

(キ) のポイント

一市民として行政の取り組みをどうみるか、そして参画できることを生徒に伝えた後、「ラウンド・ロビン」の要素を取り入れたフリートークとした。授業を終えて、短時間で多くの情報を扱い、躊躇なく自分の意見を述べるZ世代の特性を活かした授業展開の可能性に気づかされたアクティビティだった。

4 おわりに

本授業のねらいが達成できたか一過性の判断はできるものの、授業者として期待するのはもっと後々生徒の中に残るものであり、本当の意味で達成できたかは分らない。生徒を学校の机に向かわせても本人が学ぶ気がなければ実のところ何も学んではない。授業者として日常の授業で小さなきっかけをつくりながら、グローバルな視点で持続可能な社会に生きる生徒の心が動き無限の学びが生まれる瞬間を願う。

「技術の発達を主体的に支え、技術革新を牽引する力」を育てる 技術・家庭科（技術分野）の学習指導に関する研究

～第3学年「統合的な問題の解決」に焦点をあてた授業改善～

熊谷市立富士見中学校 教諭 横田 真澄



1 はじめに

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会が大きく、また急速に変化しており、将来を予測することが困難な時代となっている。学校教育には、生徒が多様な人々と協働しながら、社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることが求められている。

しかし、中学生においては、「持続可能な社会」という概念を抽象的に捉えがちで、生徒が主体的に問題を発見し、課題を解決できるようするためにも、各学年の発達段階に合わせた問題発見・課題解決の授業を展開していく必要がある。

問題発見・課題解決学習を繰り返すことで、生徒は技術的な視点で生活や社会の問題を発見し、課題を設定できるようになり、課題解決の過程で技術を評価し、技術の在り方を考え、よりよい生活の実現や持続可能な社会の実現に向けて行動できる力を養うことができると考える。

本研究では、生徒が課題を見つけ、解決しようとする姿を、「技術の発達を主体的に支え、技術革新を牽引する力」と捉え、よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて行動できる生徒を育成するための指導方法を研究する。

2 研究内容

(1) 目指す生徒像と研究仮説

本研究における「技術の発達を主体的に支え、技術革新を牽引する力」を以下の二つとして定義する。

- ・ 技術を評価し、技術の在り方を考え行動する力
- ・ 自ら技術の見方・考え方を働かせて問題発見・課題解決する力

これら二つの力を育むことができた「目指す生徒像」の姿を以下のように設定した。

- ・ 自ら技術の見方・考え方を働かせて問題発見・課題解決できる生徒
- ・ 技術を評価し、技術の在り方を考え行動できる生徒

目指す生徒像の実現と、主題である「技術の発達を主体的に支え、技術革新を牽引する力」を育成するためには、3年間の学習に系統性を持たせる必要がある。

そのためには、自ら問題を見だし、課題を設定し、解決していくことができるように、問題発見・課題解決学習の展開の工夫も必要となる。

そこで、本研究の研究仮説として以下の二つを立てた。

- ① 1・2年次の各題材で意図的・計画的に技術の見方・考え方を働かせた開発を行うことで、3年次の「統合的な問題の解決」で自ら技術の見方・考え方を働かせて問題発見・課題解決できるようになるであろう。
- ② 「統合的な問題の解決」で生徒が自ら技術的な問題発見・課題解決学習ができるような授業の展開をすることで、技術を評価し、技術の在り方を考え行動できるようになるであろう。

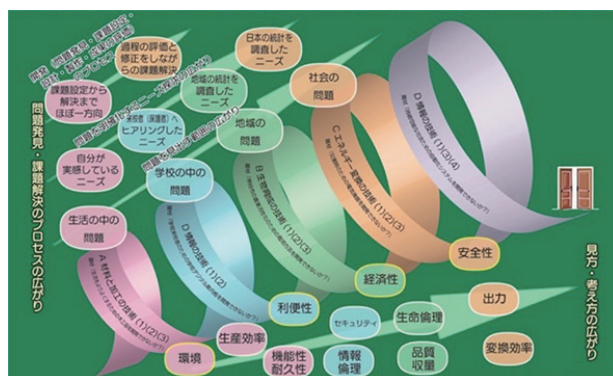
(2) 仮説に迫る手立て

仮説に迫る手立てとして、大きく二つの柱を立てた。

① 「3学年間を見通した授業展開」の工夫

技術分野の授業においては、問題発見・課題解決学習を3年間で5回配列することとなっている。この年間計画を踏まえ、3年間を見通した授業展開の工夫にあたり、3年間を見通した問題発見・課題解決のプロセスと見方・考え方の広がりをもつスパイラルとして表現した。(図1)。

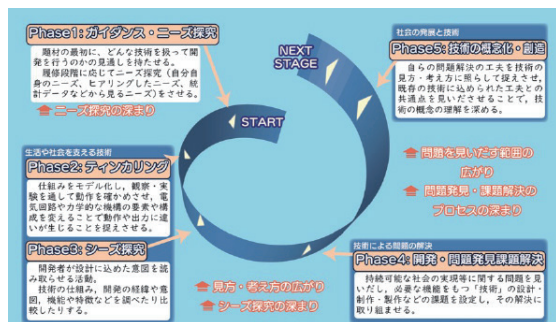
② 「技術的な問題発見・課題解決ができる題材の展開」の工夫



【図1】問題発見・課題解決のプロセス

本研究では、技術的な問題発見・課題解決学習は、社会における技術開発の擬似体験と捉えた。つまり、社会で実際に行われている開発を意識した題材の展開をする必要がある。そこで、各題材における技術的な問題発見・課題解決学習となる題材の展開を検討した。

図2に、問題発見・課題解決学習を中心とした題材の展開イメージを示す。具体的には、題材を「ガイダンス・ニーズ探究」「ティンカリング」「シーズ探究」「開発・問題発見課題解決」「技術の概念化・創造」の五つの段階で展開する。ニーズとは、理想と現実の差や社会が求めていることである。シーズとは、技術で実現できることである。



【図2】問題発見・課題解決学習を中心とした題材の展開

(3) 検証の方法

本研究のアウトカム指標として「技術の発達を主体的に支え、技術革新を牽引する力評価尺度」を作成した。本尺度作成にあたって、探索的因子分析、確認的因子分

析、構成概念妥当性の検討を行った。尺度の質問項目と因子分析結果及び要約統計量を表1に示す。

3 成果

「技術の発達を主体的に支え、技術革新を牽引する力評価尺度」を使用し、本研究の題材の展開の有効性を検証した。調査結果を表2に示す。創造力と協働力において有意差を確認することができた。探究力については、有意差を確認することができなかった。

4 考察

検証授業の結果より、本研究が提案する題材の展開で、「技術の発達を主体的に支え、技術革新を牽引する力」の創造力と協働力においては十分に育成することができた。一方で探究力については有意差が見られなかった。これは、ニーズ探究やシーズ探究の部分で、生徒にその必要感の醸成が不十分であったと考えられる。仮説①については、創造力の伸びから問題発見・課題解決能力の育成を裏付ける結果となった。また、探究力の育成という観点からは、技術の見方・考え方をより深く働かせてニーズ探究・シーズ探究を充実させることが今後の課題として見えた。また、仮説②については、創造力・協働力の伸びから技術を評価し、技術の在り方を考え行動できるように示唆している。

【表1】質問項目と因子分析結果及び要約統計量

因子名 (α 係数)	因子負荷量			共通性	平均	標準偏差
項目	I	II	III	(h^2)	mean	SD
I.創造力 (α = .86)						
1 未来の技術を予想することは好きだ	.863	-.146	.049	.661	3.51	1.172
2 社会の最新の技術を知ることが好きだ	.798	-.052	.093	.689	3.71	1.099
3 海外の技術に興味や関心がある	.779	-.032	-.040	.540	3.36	1.204
4 生活の中で技術的なアイデアを思いつくことがある	.564	.185	-.066	.419	3.40	1.172
5 技術で課題を解決するために解決策を考えることは好きだ	.547	.256	-.058	.479	3.56	1.050
6 技術が社会にどのような影響を与えているか考えている	.417	.107	.231	.448	3.68	1.038
II.協働力 (α = .78)						
7 他の生徒と協力して技術開発を進めることができる	-.093	.751	.062	.542	4.34	.780
8 先生に相談しながら技術開発を進めることができる	.058	.695	-.091	.458	4.02	.925
9 話し合いをして、みんなで決定することは得意だ	.125	.602	-.119	.375	3.79	1.077
10 技術開発では、人の意見やアイデアを参考にしている	-.151	.524	.215	.346	4.32	.759
11 技術で課題を解決するために、様々な解決策を考えることができる	.158	.476	.167	.503	3.80	.950
III.探究力 (α = .77)						
12 技術で課題を解決する際に、社会で使われている技術を調べることは大切だと思う	-.012	-.031	.811	.616	4.27	.761
13 技術で課題を解決する際に、社会から求められていることを調べることは大切だと思う	-.024	.074	.726	.575	4.25	.801
14 社会で使われている新しい技術を知ることが大切だと思う	.182	-.036	.565	.454	4.29	.823
因子寄与	4.78	4.16	4.11			
因子間相関						
I	—	.61	.65			
II	—	—	.62			

(最尤法・promax 回転、n=354)

【表2】事前・事後での「技術の発達を主体的に支え、技術革新を牽引する力評価尺度」比較

変数	ガイダンス時点		生活や社会を支える技術終了時点		t値	自由度df	p値	効果量d
	平均	標準偏差	平均	標準偏差				
a創造力	3.563	0.103	3.877	0.093	-2.796	52	.007	-.0437
b協働力	3.981	0.088	4.234	0.078	-3.351	52	.002	-.0414
c探究力	4.239	0.086	4.302	0.074	-0.764	52	.448	-0.107

対応のあるt検定

住みたい・働きたい・訪れたい 元気と希望に出会えるまち 東松山

東松山市 政策財政部広報広聴課 主事補 かわい 川合 この 鼓乃



東松山市は、都心から 50km 圏内の埼玉県のほぼ中央に位置しています。市内には関越自動車道、国道 254 号・407 号バイパスが交差するほか、東武東上線が南北に走り、交通の利便性が高いまちです。恵まれた立地条件と交通体系により、都市機能と住環境が相まって発展しながらも、緑と清流を身近に残す東松山市は、東洋経済新報社の住みよさランキングで 4 年連続県内第 1 位に選ばれています。

世界第 2 位☆「日本スリーデーマーチ」開催のまち

本年度で第 48 回を迎える「日本スリーデーマーチ」は、世界第 2 位、日本一の国際ウォーキング大会です。日ごとに変わる 5km から 50km までの 6 コースを用意しており、前回大会では世界各国、日本各地から 3 日間で延べ 4 万人以上のウォーカーが参加しました。



【第 47 回日本スリーデーマーチの様子】

身近に自然を体験できる施設

「東松山市化石と自然の体験館」では、本市が海の底だった約 1,500 万年前の地層から出たサメの歯等の貴重な化石を見学することができ、ふるいを使ったり、岩塊を割ったりして化石発掘体験ができます。発掘体験者数は令和 7 年 5 月に 10 万人を超えました。



【化石発掘体験】

【発掘されたサメの歯】

「東松山市農林公園」では、イチゴの摘み取り体験のほか、タマネギやジャガイモ、サツマイモなど旬の農産物の収穫体験ができます。春にはサクラ、夏にはヒマワリ、秋にはコスモスなど四季折々の花を楽しむこともできます。



【夏に咲き誇るヒマワリ】

「東松山ばたん園」は、約 3 万㎡の園内に約 5,000 株のばたんが植栽されている関東有数のばたん園です。4 月中旬～5 月上旬には市の花「ばたん」が色鮮やかに咲き誇ります。アジサイやイロハモミジ、ロウバイなどが植栽され、大型遊具や展望台などもあります。



はな ちょうず
【巨大花手水】

文化・芸術の振興にも注力

高坂駅西口から西へ、約 1km 続く高坂彫刻プロムナードには彫刻家 たかた ひろあつ 高田博厚の作品が 32 体設置されています。それぞれの台座には、作者の短文が添えられ、作品を一層引き立たせています。高坂駅西口の区画整理事業が完了したことを記念し、1986 年から 1994 年にまちづくりのシンボルとして設置されました。

市内の観光拠点を活用するとともに、高速道路への良好なアクセスを生かし、さらなる地域活性化を図っていきます。ぜひ、東松山市に遊びに来てください！

美里町の教育 『信頼と感謝』

年度美里町教育委員会指導主事を経て、平成 25 年度本庄市立秋平小学校校長に就任。平成 27 年度本庄市教育委員会学校教育課長、その後、令和元年度本庄市立児玉小学校校長、令和 4 年度本庄市立本庄東小学校校長を歴任。
令和 7 年度より現職

美里町教育委員会 教育長 木村 健治



1 はじめに

令和 7 年 4 月 1 日付で美里町教育委員会教育長に就任した。私自身、美里町に生まれ、美里町に育てていただいた者として、教職を退職後、教育長という立場で地元の子供たちの未来を育む職に就いたことに感慨深いものがある。歴代の教育長が築いてこられた美里教育を継承し、微力ながら更なる発展・充実に向け、誠心誠意努めて参りたいと考えている。

さて、美里町は、埼玉県の北西部に位置する、自然豊かな田園風景が広がる町である。学校教育では、町立の小学校が 3 校、中学校が 1 校あり、およそ 710 名の児童生徒が毎日元気に学校に通っている。しかしながら、近年は児童生徒数も減少傾向にあり、現在小学校 3 校の統合に向けた検討・準備が進んでいる状況である。本町の教育は、「美里町教育振興基本計画」のもと、『信頼と感謝』を基本理念として、教育行政を進めている。以下、本町での取組をいくつか紹介する。

2 「信頼」される美里教育のために

学校教育の基盤は、なんといっても「信頼」である。私は、信頼がなければより良い教育はできないと考えている。では、信頼を得るためにはどうすべきか。その方策はいろいろあると思うが、本町では、第一に、児童生徒の確かな学力の育成に重点を置いている。児童生徒の学力保障は、学校教育の責務であり、そのための取組として、(1) 学力向上研究委嘱事業の実施（学力向上研究委嘱校を毎年 1 校委嘱し、町内 4 小中学校に研究成果を波及させる）、(2) 「美里町の教育スタイル」の作成と実践（町内 4 小中学校の学習スタイルの統一を図り、落ち着いた雰囲気の中で学習に集中する授業づくり、学習環境づくりを行う）、(3) 読書活動の奨励（読み聞かせの継続や本に触れる機会を増やす）などの取組を進めている。このような取組を進めているが、ベースとなるのは日々の授業・活動である。教職員が研究と修養に励み、教員としての資質向上に努めるとともに、教材研究をしっかりと行うことで 1 時間 1 時間の授業を充実さ

せ、わかる・できる授業、楽しい授業の展開に繋がっていきたいと考える。

3 「感謝」の心を育む美里教育のために

豊かな心を育む教育も本町の教育行政の重点の一つである。特に「感謝の心」を育むことは、自己中心的な考え方だけでなく、他者や物、環境などの視点を意識することになり、自己と他者をそれぞれ尊重できるような人間関係を築くことにも繋がると考える。その取組として、(1) あいさつ・ありがとう運動（町をあげて 5 月と 9 月は重点推進月間として、元気なあいさつ・ありがとうで笑顔の輪を広げる）、(2) 小学生を対象とした芸術鑑賞会の実施（小学校の全児童が一堂に会して、本物の芸術に触れる鑑賞会を実施し、豊かな感性を育むとともに、小学校 3 校の交流を図る）、(3) アドベンチャー教育の体験（中学 1 年生を対象に社会教育施設にて、仲間と協力する素晴らしさを学ぶことができる活動プログラムを体験し、チームワークや自尊感情、他者理解などを高める）などの取組を進めている。このような取組を進め、感謝の心を育むとともに、他者との関わり方を学び、自分とは違う価値観を理解することのできる人になってほしいと願っている。

4 結びに

教育長となり、今の自分の夢は、美里町の児童生徒が、明るいあいさつと笑顔に溢れ、自他を大切にしながら、元気に学校生活を送ることである。そのために、今日的な課題の解決に向け、いろいろな取組を進めていきたいと考えるが、その上で、当たり前のことがなかなか分りづらい時代だからこそ、「当たり前のことを当たり前」実践することを大切にしていきたいと考えている。

そして、自分自身の思いとして、「教育は愛」という恩師の言葉を胸に、児童生徒・保護者・地域、そして教員や職員と関わり、『信頼と感謝』の美里教育を推進していきたい。

第 67 回 「埼玉県高校美術展」
埼玉県芸術文化祭実行委員会賞 受賞作品



「中枢を知る」

県立大宮光陵高等学校 第2学年（出品当時）
にしがた りこ
西潟 莉来

第 67 回 「埼玉県高校美術展」
埼玉県教育委員会教育長賞 受賞作品



「朝を想えば」

県立芸術総合高等学校 第 2 学年（出品当時）

とうごう しずか
東郷 静香



彩の国
埼玉県

埼玉教育 第 79 巻 第 1 号（第 829 号）

編集・発行 埼玉県立総合教育センター

代 表 所長 馬場 敏男

〒361-0021 埼玉県行田市富士見町 2-24

レイアウト 有限会社 マックスアーリー 熊谷市柿沼 841-5